

白雲を望む

霜
康司

登場人物

(★は女役、(★)は男役だが女優も可。●は二役可)

桂小五郎 (木戸孝允) 一八三三〜一八七七 (明治十年)

幾松 (桂の妻松子) 一八四三〜一八八六

伊藤利助 (伊藤博文) 一八四一〜一九〇九

お梅 (伊藤梅子) 一八四八〜一九二四

吉田稔麿 一八四一〜一八六四

山県有朋 一八三八〜一九二二

南貞助 一八四七〜一九一五

村田蔵六 (大村益次郎) 一八二四〜一八六九

西郷隆盛 一八二八〜一八七七

大久保一蔵 (利通) 一八三〇〜一八七八

おゆう (一力亭の芸妓 大久保の妾)

中村半次郎 (桐野利秋) 一八三九〜一八七七

高崎左太郎 (正風) 一八三六〜一九一二

岩倉具視 一八二五〜一八八三

(★)

★

(★)

★

●

●

★

●

(★)

坂本龍馬

一八三六〜一八六七

岡田以蔵

一八三八〜一八六五

役人

近藤勇

一八三四〜一八六八

沖田総司

一八四四〜一八六八

新撰組隊士1

新撰組隊士2

刺客1

刺客2

ハリー・パークス

一八二八〜一八八五

ライザ

兵たち

女将おかみ

★
●

(★)
●

(★)
●

(★)
●

●

●

(★)
●

●

第一幕

舞台の中央奥に梅の活け花。舞台前面中央に平台スペースがある。舞台後方下手側に六〇センチほど上がった三畳ほどのスペースがあり、上手側にはさらに六〇センチほど上がったスペースがある。この上がった部分はときに室内の空間になる。舞台中央奥から階段があるが、その場に応じて移動する。装置は極力抽象性を保ち、一瞬にして時間・空間を飛び越えても不都合がない程度にする。

プロローグ 安政の剣術試合

近藤

安政五年（1858年）江戸中の剣士が、江戸三代道場の一つ士学館しがっかんに続々と集まってきた。日本一の剣士を決める剣術試合が催され、各藩はん選りすぐりの腕自慢が、道場にひしめき合っていた。その中には、あの人斬り半次郎、薩摩の中村半次郎なかつむらはんじろうもいた。

半次郎

俺も腕には自信があったが、桂小五郎がこれほど強いとは思わなかつ

た。桂は九段坂の練兵館れんべいかんで師範代しはんだいをしていて、神道無念流しんとうむねんりゅう免許皆伝だった。神道無念流は刀を大きく振り上げ、満身の力で打ち下ろす。だから神道無念流を相手にするなら胴を狙え、とよく言われた。俺もそのつもりだったが、桂が竹刀を振り上げた瞬間、その姿は視界から消え、面を打たれていた。俺だけじゃない。天然理心流の近藤勇も、土佐の人斬り、岡田以蔵おかだいぞうも、子供扱いだった。

以蔵

結局、桂は決勝戦まで勝ち上がった。対する相手は、北進一刀流免許皆伝、桶町千葉道場塾頭おけまち、坂本竜馬。この坂本もめっぽう強かった。無敗を誇る二刀流の島田逸作しまだいつさくでさえ一本も取れず、打ち倒されて気絶していた。俺は子供の頃から竜馬を知っていた。ネシヨンベンたれだったあいつが、どうしてこうも強くなったのか不思議で仕方なかった。人は変わる。もしかしたら俺も変わるかもしれない。

近藤

この日の決勝は三本勝負ということになっていた。すでに坂本、桂、共に一本ずつを取り合い、いよいよ最後の勝負となった。

桂、坂本が向き合う。

近藤

この日だけでも何十本も勝負をしていたのに、ふたりとも息一つ乱れ

ていなかっただ。

半次郎 このとき俺は誓った。この男たちとは生涯決して戦うまい。

以蔵 このとき俺は誓った。この竜馬という男を生涯かけて追いかけてよう。

近藤 このとき俺は誓った。この桂という男を生涯かけて追いかけてよう。

半次郎 三本目はすでに一〇回も相打ちになっていた。相打ちが一〇回も続く

など考えられん。しかも二人の動きは少しも鈍っていなかっただ。

以蔵 そして一一回目の勝負が始まった。

桂と坂本が竹刀を激しく合わせて、すれ違っただ。

審判の声 一本！

半次郎 見えたか？

近藤 桂の面か？

以蔵 いや、坂本の突きだ。

審判の声 勝負あり。北進一刀流坂本竜馬君！

一同「おー！」と大声でうなる。桂と坂本、礼をして面を取る。二人を皆が取り囲む。

以蔵 竜馬、見事じゃったな。

半次郎 全くお二人ともお見事じゃした。

近藤 秘剣はし奔り竜、しかと拝見した。

桂 坂本さん、参りました。

坂本 いや、わしの負けじゃ。今のが真剣じゃったら、わしの突きはかすり傷、桂さんの面は一撃必殺じゃ。

桂 真剣なら、三本も勝負できません。

近藤 もし真剣で立ち合うなら、お二人はどうなさいますか？

坂本 そうじゃな、短い刀にするじゃろな。

半次郎 ないごて？

坂本 実戦では家の中で斬り合うことが多い。室内で長い刀は邪魔じゃ。

近藤 なるほど。桂さんはどうです？

桂 真剣なら、逃げますよ。

半次郎 逃げるち？ 武士が逃げてんよかと申さるつとな？

桂 もちろんです。

坂本 兵は凶器なり、ですな。

以蔵 何かよ、それ？

坂本

斎藤先生のお言葉ぜよ。兵は凶器なり、其身一生用ゆることなきは大幸というべし。つまり刀は人殺しの道具に過ぎんから、使わん方がええちゆうこつちや。

以蔵

それですめばえいがね。

坂本

そうじゃ、それですめばえいがの。

半次郎

すまんときはどげんするつもりでござすか？

坂本

そらやっぱり逃げるんじゃ。のう、桂さん？

桂

ええ。やるべきことがあるうちは。

暗転。

第一景 春 祇園の御茶屋

春の活け花。上手に三味線を爪弾く幾松。

幾松

春は花 いざ見にごんせ東山 色香あらそう夜桜や
うかれうかれて 粋も不粋もものがたい

二本差してもやはらかう

祇園豆腐の二軒茶屋

下手側の一階の部屋で薩摩藩士大久保一蔵、中村半次郎、高崎左太郎と岩倉具視が酒を飲んでいる。芸妓おゆうが酌をしている。

高崎

岩倉様、こんたびはありがとうございます。お陰様で、わが薩摩藩が御所ごしよの警備を仰せつかりました。

岩倉

そらよかった。けど帝みかどまで動かすのは大変でした。まっこて、かたじけなか。岩倉様のお力でごわす。

大久保

おゆう もう一杯、いかがどす？

岩倉 おおきに。いつ見てもおゆうさんはかわいいな。

おゆう ま、お上手なこと。

岩倉 上手な人は大久保さんや。これで朝廷は大久保さんの思うまま。

大久保 滅相もなか。帝のおそばにお仕えし、詔みことりをお受けするだけでごわす。

岩倉 お受けするのやのうて、詔を作るんですやろ？

大久保 そのようなことは決してありません。

岩倉 まあどっちでもよろしいけど、長州にはちよつと気の毒でしたな。なんにも悪いことしてないのに、京都から追い出されたんやさかい。

大久保 これも詔でごわす。致し方なか。

半次郎 じゃつどん町人は長州をば正義ち言うて、長州藩士を匿っておりもす。

大久保 ほうっておけばよか。あとは幕府がなんとかするじゃろ。

半次郎 薩摩はこいから倒幕か公武合体か、どっちに進むのでごわすか？

大久保 西郷はもちろん倒幕じゃ。

岩倉 しかし島津の殿様は佐幕やろ？

高崎 ということは、また薩摩の中で揺れるということでごわすか。もう寺田屋のようなことはごめんでごわす。

岩倉 あれは悲惨でしたなあ。薩摩^{さつま}隼人^{はやと}の同士討ちやから。

半次郎 そげんならんように、岩倉様にも大久保様にもお会い頂きたか人物がおりもす。

岩倉 へえ。誰ですやろ？

半次郎 土佐藩の脱藩浪士坂本竜馬でござす。実は隣の間控えておりもす。今お会い頂いてもよしごあすか？

岩倉 かまいませんけど。

半次郎 大久保さまも、よかですか？

大久保 ああ。おゆう、頼む。

おゆう はい。しばらくお待ちを。

おゆう、退室。

高崎 おはん、脱藩浪人なんど連れてきて、何をたくらんどる？ まさかお

びき出してバツサリ、か？

半次郎 うんにや、うんにや。坂本さまはただの浪人ではあいもはん。軍艦奉行勝海舟様のもと神戸海軍総練所^{じゆくどう}で塾頭^{じゆくとう}をされておられ、腕の方もおそろしゆう強うござす。

岩倉 へえ、半次郎はんが言うのやから、相当ですな。

おゆうに連れられて坂本が入ってくる。

おゆう 坂本様がおいでになりました。(去る)

坂本 失礼します。

半次郎 坂本様。お待たせしました。どうぞこちらにお座りください。

坂本 かたじけない。坂本竜馬と申します。

半次郎 こちら、公家の岩倉具視様でござす。

岩倉 はじめまして。

坂本 よろしゅうお願いするがで。

半次郎 こちらは薩摩藩御小納戸頭取、おこなんどとうどり大久保一蔵、同じく薩摩藩士高崎左太郎でござす。

大久保 ごとこそいつらつしやおいもした。

高崎 よろしゅうお頼みもします。

岩倉 坂本さんは大した剣の使い手やと聞きました。

坂本 いやあ、刀はなんの役にも立ちやーせん。もはや剣の時代じゃあないがで。

半次郎 剣術が古かち言わるつとな？

坂本 そうじゃ。古いな。

半次郎 こいは坂本さんの言葉とも思えん。外国が押し寄せてくるこん時代に、
剣も持たんでどげんして戦うとでござすか？

坂本 ほれ、今はこがなものがあるがで。

坂本、懐からピストルを出す。

高崎 そいは何でござすか？

坂本 六連発のピストルじゃ。どうなが？（高崎にピストルを渡す）

高崎 短筒でござすな。

坂本 そうじゃ。よう命中しよる。

大久保 ほう、こげなもんは初めて見もした。

坂本 日本に二丁しかないがで。

半次郎 そげなものをどげんして手に入れられとな？

坂本 長州の高杉さんから頂いたんじゃ。近いうちにこんな銃を何百、何千
丁と仕入れるつもりじゃ。

半次郎 そいはまた壮大な計画でござすな。もしやそのために神戸で船の訓練

を？

坂本 そうちや。大久保さん、いつでも神戸に遊びに来とおせ。西洋の船の動かし方をご覧に入れるがで。

大久保 そんな船でどこへ行かれるおつもりでござすか？

坂本 まずは京都、摂津の脱藩浪人を二〇〇人ばかりかき集め、蝦夷地へ行くつもりじゃ。そこで新しい国を作るがで。

半次郎 新しい国？

坂本 そうやか。考えてもみとおせ。たった四隻の蒸気船でこの国はひっくり返ってしもうた。ほんならわしが蒸気船を四、五隻手に入れたら、この国はひっくり返せるということじゃ。やき、わしは蝦夷地で外国と通商し、船艦でも大砲でも小銃でも揃えてご覧に入れる。

岩倉 ほほほ。それは面白い。

高崎 資金はどげんさるつとでござすか？

坂本 幕府から三、四千両頂くことになっちゅう。

大久保 はは。わかいもした。こいが噂の「坂本のホラ」でござすか。

坂本 ホラではないき。老中の水野様とも話はいちちよる。

半次郎 ちということは、幕府の金で幕府を倒すつとでござすか？

坂本 倒すんやない。幕府に自分から政権を投げ出させるのじゃ。倒幕も佐

幕もなしに、平和のうちに国の形を変えるのじゃ。
高崎 そげなこつがでくつとでござすか？

坂本 準備はできちゆう。わしはこれから日本を今一度洗濯いたし申す。

大久保 面白か。まずは一献、いかがでござすか？

坂本 かたじけない。

薩摩の部屋が溶暗。笛の音が聞こえる。

按摩師が杖をつきながら笛を吹いて客を呼んで歩いているのだ。女将が店に引き入れる。

女将 もし、按摩あんまやさん。

按摩 へい。

女将 今よろしい？

按摩 へえ。

女将 ではちよいといらしてくださいな。

按摩 毎度ありがとうございます。

女将が按摩師を連れて入ってくる。二人は階段を上がり舞

台中央奥の一室に入る。

女将 こちらです。どうぞ、足下お気をつけてくださいまし。

按摩 へえ。どうもおそれいりやす。

女将 もうよろしおすえ。桂さん。

按摩師は桂小五郎であった。

桂 (目を開ける) ふう。すまんな。

女将 失礼ながらその格好、結構似合ってはりますな。

桂 うん。なかなか気に入ってる。

女将 もうすぐ幾松はんが来はりますさかいに、ちよっとお待ちください。
ところで、今日のお名前はなんどしたかいな？

桂 しんぼりまつすけ 新堀松輔。今日はそれで頼む。

女将 新堀はんですな。わかりました。間違えんようにせんと、今日は薩摩のお待さんも来てはりますよつてに。

桂 薩摩が？

女将 へえ。けどご心配なく。鉢合わせなんて野暮なことにならんように致

します。

桂 よろしく頼む。

女将 料理は皆さんそろってからでよろしおすか？
桂 そうしてくれ。

幾松登場。

幾松 お待っどさんどす。

女将 ほなうちはこれで。幾松はん、あとはよろしゆう。

幾松 へえ。女将さん、おおきに。

女将退場。

幾松 お久しぶりでございます。

桂 うん。元気にしてたか？

幾松 へえ、おおきに。ちつとも来てくれはらへんから、なんぞあつたんかと心配しておりました。

桂 すまんすまん。ちよつと大変なことがあつてな。

幾松 聞いてます。長州が御所から追い出されたそうすな？

桂 よく知ってるな。

幾松 それくらいのこと、京都の人はみんな知ってます。薩摩と会津のお侍が手を組んだんですやろ？

桂 そうだ。倒幕を訴えてきた長州が邪魔になったのだ。

幾松 それで桂さんはどうなさるおつもりで？

桂 しばらくは逃げ回るしかない。

幾松 長州に帰りはるんですか？

桂 それも思案中だ。

幾松 ほなまたしばらく会われしまへんな。

桂 我慢してくれ。なにしろこんな格好でないと出歩けんのだ。

幾松 新撰組のせいですやろ？

桂 この店にも来たか？

幾松 台所のお鍋の中まで調べて帰りはりました。

桂 すまんな。僕のせいで迷惑をかける。くれぐれも用心してくれ。

幾松 まあ、うちのこと心配してくれはんのどすか？ おおきに。桂様のこ

桂 とはうちがこの三味線にかけてお守りします。

桂 それは頼もしい。

幾松 余計なことかもしれまへんけど、お持ち頂きたい物があります。

幾松、物入れからなにやら取り出す。

幾松 これは火遁かとんの術、こちらは水遁すいとんの術、土噸どとんの術の道具でございます。

桂 これは火薬玉だな。こっちは竹筒、こいつは毒薬だろう。どこでこんな物を？

幾松 ごひいきの幕府の忍者様から。

桂 そうか。でも幾松、僕は忍者じゃない。

幾松 違うんですか？

桂 うん。でもまあせつかくだからもらっておく。しかしここの客層は幅広いな。

女将に連れられて、伊藤、吉田、山県、南、お梅が入ってくる。

女将 新堀様、お連れの方がお見えでございます。

吉田 遅くなりました。

桂 おお、吉田君。

伊藤 お久しぶりです。

山県 ごぶさたです。

南 お邪魔します。

桂 伊藤君、山県君、南君も、ささ、こっちに来てくれ。

吉田 失礼します。

女将 また雨が降ってきたみたいですよってに、気をつけてくださいな。

山県 え？ 雨は降ってませんでしたよ。

女将 そうどすか。けど寺田屋さんでも、ひいらぎ柵屋さんでも雨が合ったと豆腐屋

桂 さんがおっしゃつとりました。

女将 そうか。それはありがとう。いつもすまんな。

女将 ほな、ごゆっくり。

女将、出て行く。

山県 奇妙なことを言う女将ですな。雨なんかもうとつくに上がってるのに。

桂 気をつけた方がいい。新撰組がかぎ回ってるらしい。

吉田 まさか、さつき女将が言ったことは？

桂 うん。そういうことだ。

山県 どういうこと？

吉田 暗号だよ。豆腐屋が新撰組、雨が手入れ、ですね？

桂 ああ。

山県 深いなあ。すばらしい。

桂 くれぐれも用心してくれ。

山県 承知しました。

伊藤 桂さん、お話の前に家内を紹介させてください。お梅と言います。

お梅 お邪魔します。お梅と申します。

桂 初めまして。しかし伊藤君、家内とは……

南 そうなんです。伊藤さん、野村君の妹と離縁したんです。

桂 本当なのか？

伊藤 ええ、まあ。

桂 あきれた奴だな。野村君の妹はもともとこの山県君の嫁になるはずだ

伊藤 ったのに、君が頼み込んだのではなかったか？

伊藤 そうなんです、まあすれ違いもありました。

南 女好きのせいです。

お梅 でも伊藤様に身請けして頂いて、私は助かりました。

南 いやいや、助かっているのは伊藤さんの方だ。このお梅さん、なかなか

かの商売上手で、下関の小物屋が結構繁盛してるんです。

お梅 それも伊藤様に用立てして頂いたおかげです。

伊藤 いや、あの金はな、実は南君が藩の公金からくすねたのだ。

君たちはまたそんなことをしてるのか。藩の金は民衆の金だぞ。

お梅 （頭を思い切り下げて）申し訳ありません。悪いのは私です。

桂 いやいや……お梅さん、あなたを責めているわけではありません。ど

うか頭を上げてください。

お梅 許してくださいませか。

桂 許すも許さんもないですよ。

南 よかった。桂さんさえよしと行ってくだされば、我が藩で文句を言う

奴はいない。

桂 全く困った奴らだ。

吉田 あの、そろそろ。

桂 うん。幾松、お梅さんに庭を見せてあげてくれ。

幾松 はい。ではお梅さん、こちらへどうぞ。

お梅 ありがとうございます。

幾松、お梅を連れて退場。

南 ところで、今日我々に会わせたい人物というのは、どういう方です？
桂 村田蔵六先生と言って、緒方洪庵先生の適塾で塾頭を務められた秀才だ。

吉田 適塾と言うことは蘭学者ですか。

桂 うん。おそらく日本最高の学者だ。

吉田 それは頼もしい。

桂 ただちよつと通じないんだ。

山県 通じないって、何がです？

桂 常識がだよ。たとえば冬の寒い日に「寒いですな」と言うだろ？
伊藤 うすると「冬が寒いのは当たり前であります」なんて言うんだ。それは変わり者ですね。

唐突に村田登場。

村田 村田であります。

山県 うわ！

桂 これにはよくおいでくださった。ささ、こちらへ。こちらが今話していた村田蔵六先生だ。

村田 村田蔵六であります。

吉田 長州藩士吉田稔磨としまろです。よろしくお願ひします。

山県 同じく長州藩士山県有朋やまがたありともです。

伊藤 同じく伊藤利助りすけです。

南 南貞助ていすけです。よろしくお願ひします。

村田 こちらこそよろしく。

山県 いやあ、それにしても暖かくなってきましたなあ。

村田 春が暖かいのは当たり前であります。

山県 あ、やっぱり。

村田 何がでありますか？

山県 いえ、なんでもありません。

桂 村田先生は数学や西洋式の兵術にも通じておられる。宇和島藩うわじまはんでは蒸気船も造られた。

吉田 なんと！ それはまことですか？

村田 ペリーの戦艦以上の船を造ってご覧にいられます。
南 すばらしい！ 大砲も西洋式の炸裂弾さくれつだんにできますか？

村田 もちろんであります。

吉田 うーん、おいしいな。これが一年前なら、情勢は変わっていたのに。

南 全くです。今じゃ下関の砲台はアメリカに占拠され、この山県の檜で

砲台を攻めてるんだから。

村田 そんなやりたい放題許しておいてなるものですか。

山県 まじめに仰ってるのですか？

村田 当たり前です。外国の軍艦が下関海峡を通るなど、領海侵犯、打ち払

うのが当然だ。

伊藤 しかし、気概だけでは戦いくさに勝てませんぞ。

村田 臆病ではもつと勝てんであります。そもそも敵は上陸するつもりなど

なく、大砲をぶっ放して、様子を探っているだけです。海沿いの住民

を避難させれば、戦をやっても人的被害はほとんど出ない。

吉田 なるほど。それも理屈じゃ。

村田 もはやことごとく死に尽くしても許しはせぬという覚悟を示すことが
何より大事です。

吉田 なるほど。しかし長州の敵は外国だけではありません。薩摩や会津が

外国と手を組んだら、いかが致します？

村田 歌で対抗するのであります。

伊藤 歌ですか？

山県 ははは。冗談を仰つては困ります。

村田 冗談ではありません。歌は味方を鼓舞し、敵を威圧します。西洋の軍隊には必ず音楽隊があり、たとえばフランス国歌ラ・マルセイエーズなしに、フランス革命はありません。

伊藤 そんな歌が我が国にありますか。

村田 私が作りました。聞いて頂けますか？

吉田 もちろん。

村田 ではちよいと失礼するであります。どなたか笛を吹いてください。

吉田 適当で良ければ。

村田 よろしくお願いします。

村田、笛を取り出し吉田に渡す。自らは太鼓をたたくバチを取り出し、辺りを叩きながら、「トンヤレ節」を歌う。
ピーヒャラ、トン、ピーヒャラ、トン。

村田

♪宮さん宮さんお馬の前に
ひらひらするのは何じやいな

村田 皆

トコトシヤレ トシヤレナ
あれは朝敵征伐せよとの
錦の御旗じゃ知らないか

♪トコトシヤレ トシヤレナ
音に聞こえし関東侍

どっちへ逃げたと問うたれば

皆

トコトシヤレ トシヤレナ

城も気概も捨てて

吾妻へ逃げたげな

皆

トコトシヤレ トシヤレナ

トコトシヤレ トシヤレナ

トコトシヤレ トシヤレナ

歌い終わって一同拍手。

伊藤 山県

これはいい!

やる気がわいてきますなあ。

南

幕府軍なんか怖くないって感じた。

村田

感じだけではありません。実は長崎で軍艦と大砲を買い付けました。

伊藤

なんだ、それを先に言ってくださいよ。

桂

村田先生には長州藩の政務座役事務掛せいむざやくじむかかりをお願いしたいと思っている。

今後長州藩の軍事をすべて指揮して頂きたい。

山県

ものすごい抜擢だ！

吉田

先生、今や長州の命運は風前の灯火です。枯れ木に花を咲かせるよう

な難題ですが、どうかよろしくお願いします。

村田

お任せください。生きてさえいれば、花も咲きます。

桂

高杉が村田先生に付けたあだ名は『火吹き達磨だるま』だ。みんな、火傷せんようにな。

幾松、酒を持ってくる。

幾松

おまっとさんどす。よろしおすか？

桂

ちようどいい。頼む。

幾松

はい。(注いで回る)何か楽しそうな歌どしたなあ。

山県

あの歌が我らの新兵器であります。

幾松 へえ、それは面白い趣向どすなあ。

村田 (杯を受け取って) どうも。

幾松 どうぞ。

吉田 (杯を受け取って) かたじけない。

南 恐縮です。

山県 それでは乾杯しますか？

桂 では村田先生、これからよろしくお願いします。

皆 よろしくお願いします。

村田 ありがとうございます。

山県 あー、うまい！

幾松 もひとつどうぞ。

山県 おおきにどす。

南 こうして京都で酒を飲めるのも後何回あるやら。

伊藤 どうせなら今夜は久しぶりにパーとやりますか？ 先斗町のなじみの

店を貸し切りましょう。

南 いいですねえ。

桂 それがそうもいかん。実は伊藤君、南君、君たちに頼みがある。

伊藤 なんですしょう？

桂 君たちは外国に行きたいと言っていたな？

南 ええ、言いました。西洋を知らずして西洋と戦えません。

吉田 幕府に知れたら、即打ち首だ。それでも行きたいか？

伊藤 今さら幕府の御法度など、どうということはありません。

桂 よく言った。ではイギリスに行ってくれ。西洋の政治、経済、軍事を

はじめ、あらゆることを学んできてくれ。

伊藤 本当に、いいんですか？

吉田 実は他にも遠藤君、山尾君、野村君に頼んである。周布さんには話を

付けてあるから、金の心配はいらん。やってくれるか？

南 もちろんです。

伊藤 しつかりと学ばせていただきます。

吉田 では早速、対馬藩邸に行ってくれ。桂さんの用だと言えば、横浜まで送ってくれる。そこからイギリス船に船員として乗る手はずだ。

伊藤 もうそこまで話が進んでるんですか。

南 なんか、どきどきしてきましたね。

山県 しつかり学んで来いよ。

伊藤 おお。ではすぐに準備にかかります。

南 そうだ、お梅さんは？

幾松 あちらで女将さんと話し込んでおりました。なんでも京都にいる間こ

こで働きたいとか……

伊藤 それはちよつど良い。ちよつと女将と話を付けてきます。

南 では失礼します。

伊藤、南去る。

山県 しかしえらく急な話ですな。

桂 いや、遅すぎたくらいだ。我々はあちらの国を知らなすぎる。

吉田 でもいい人選です。あいつら、戦向きじゃないが、きつといつかは役に立つ。

山県 あの、私はどうしたらいいんでしょうか？

桂 山県君には高杉に代わって奇兵隊きへいたい総督そうとくになってもらう。

山県 高杉さんの後釜あとがまとはこれまた大役でありますな。

吉田 そうだ。君には軍人の道を歩んでもらいたい。政治と軍事は分けておかないと、必ずややこしいことが起こるからな。

山県 はい。わかりました。

桂 頼んだぞ。ここを乗り切らなければ長州は滅び、長州が滅びればこの

国は滅ぶ。

新撰組の沖田と近藤が登場。

沖田 御用改めである。主人はいるか！

女将とお梅が出てくる。

女将 はい、ただ今。これはこれは、おつとめご苦労様でございます。私めが女将でございます。

沖田 中を見せてもらうぞ。

女将 (階段上に大声で) 皆様、御用改めでございます！
沖田 (刀を抜いて) 黙れ。騒ぐと命はない。

お梅 女将さん……

近藤 いいか、桂には手を出すな。

沖田 わかっています。

隊士たちがばたばたと舞台に乱入すると同時に、下手側の

一階の襖が開き、中村半次郎と薩摩藩士たちが登場。

半次郎

何の騒ぎじゃ。おいたちを薩摩藩士ち知つてのことか。

沖田

新撰組隊士沖田です。ここで京都市中を焼き払う謀議が行われていると知らせがあり、取り調べに参ったしだい。今しばらくお静かに願いたい。

半次郎

薩摩藩士の前で刀を抜いたからには、おはんら覚悟はよかか？（刀を抜く）

近藤

これは中村半次郎殿。お久しぶり。

半次郎

近藤さあか。薩摩藩士を取り調べるわけを伺いもんそか。

近藤

二階にいるのも薩摩藩士でござるか？

半次郎

そげなこちや知らん。こげな扱いは、気に入らんど。

近藤

しばしお静かに願いたい。今宵の虎徹は血に餓えておりますゆえ。

幾松が畳をたたくと、隠し出口が現れる。

幾松

ここから逃げておくれやす。

山県

おお！ こんなところに隠し出口が。

桂 女将が作ってくれた仕掛けだ。ここから裏口に出られる。

山県 深いなあ。すばらしい。

吉田 (窓からそつと下を見て) 裏口も固められています。

桂 僕が中で騒ぎを起こして、裏の連中を呼び込む。その間に逃げるんだ。

吉田 山県が村田先生をお連れしろ。僕はここで外の様子を見る。

山県 任せてください。

村田 しかし、それではお二人が危ない。

山県 大丈夫。薩摩の連中に暴れてもらいます。さ、早く下へ。

吉田 いいか？ 裏の連中が中に入るまで待つんだぞ。

山県 さ、参りましょう。

村田、山県が隠し出口から消える。

幾松に手を引かれて、桂が杖をつきつつ二階から降りてくる。

幾松 お取り込み中申し訳ございません。ちよいと通してやってくださいまし。

桂 ごめんくださいやし。

幾松 すみません。目が不自由なもので。
桂 ごめんくださいやし。

桂、階段を歩きながら、新撰組には気づかれぬよう玉を置く。

近藤 そのこの按摩、ちよつと待て。

桂 へい。

近藤 新撰組の前を横切るとは良い根性だな。

幾松 申し訳ございません。一橋様がお呼びでございまして。

近藤 一橋様？ ほう。人気者だな。

桂 滅相もございません。

近藤、斬りつけるが、桂が杖で受ける。

近藤 おぬし、ただの按摩ではないな。

桂 滅相もございません。

近藤 怪しい奴。ゆっくり取り調べてやる。

桂の置いた玉が爆発。新撰組隊士たちが裏口から入ってくる。

吉田 よし。今だ！

半次郎 皆んな、出てけ！！

薩摩藩士たちも刀を抜き、新撰組と大乱闘になる。桂と幾松は逃げ、新撰組隊士立ちが「待て」と後を追う。吉田、窓の外に叫んだ後逃げようとするが、新撰組隊士数名に取り囲まれる。

隊士1 どの藩の者だ？ 名を名乗れ。

吉田 吉田松陰先生門下、長州藩士、吉田稔麿。

隊士2 仲間はどうした？

吉田 拙者ひとりでお相手致す。

隊士たち、吉田に襲いかかる。殺陣。

坂本

ほたえなや！ ほたえなや！

ピストルを構えた坂本、岩倉と大久保をかばうようにして共に逃げる。吉田は、階段の手前で袈裟懸けに切られ、階段を落ちる。階段下で吉田が動かなくなったところで全員の動きが止まり、闇。

第二景 夏の鴨川く出石く京都

奥に夏の活け花。

夏の夕刻の鴨川。舞台奥でむしろを敷いた乞食が無気力そうに寝ている。上手から幾松が三味線を抱えて歩いてくる。

幾松 (都々逸)恋に焦がれて 鳴く蟬せみよりも 鳴かぬほたる蛍が 身を焦こがす

声 幾松！ 幾松！

幾松、立ち止まって振り返ると、奥にいる乞食と眼が合う。

幾松 何？

乞食 幾松、僕だ。わからんか？

幾松 ……まさか。

乞食 そうだ、僕だ。

幾松 桂様、よくぞご無事で。

桂 うん。今は乞食のコースケと呼んでくれ。

幾松 お会いしようございました、コースケ。

桂 僕もだ。ここら辺りに潜んでいれば、もしやお前に会えないかと思っ
ていた。

幾松 うれしゅうございます。

桂 このような姿をさらしたくはなかったが。

幾松 何を仰います。どんな身なりをされようと、幾松には同じお声に聞こ
えます。

桂 ありがとうございます。

幾松 このたびの戦で長州のお方はほとんどお亡くなりになったと聞き、案
じておりました。

桂 久坂も入江もみんな討ち死にだ。もはや長州藩士は京都にいない。

幾松 村田様は？

桂 山県と長州に戻った。ただ外国にも幕府にも攻められて、あつちも風
前の灯火だ。

幾松 では桂様も長州に戻られるのですか？

桂 戻りたくても戻れん。検問でアリが這い出る隙間もない。

幾松 こんな風に思うのが不謹慎なのはわかっております。でも不躰ぶしつげと知

りつつ、申し訳ないと思いつつ、うれしい気持ちを抑えることができません。あなたが京都にいたことが、不幸な戦を生き延びご一緒できることが、ありがたくてなりません。

桂 過分な言葉、身にしてみる。今はどれほどありがたくとも、何一つその気持ちを表せないのを許してくれ。

幾松 今のお言葉だけで十分です。それにしても、なんとおいたわしいお姿。なんぞご入り用のものはございませんか？ 着物でも刀でもご用意致します。

桂 今の僕は本物の乞食と何も変わらん。三日間ろくに食ってないのだ。おにぎりをお持ちします。他には？

幾松 桂 さて。あまりいろいろ持ち歩くわけにもいかんし。

幾松 桂 ではすぐ戻りますから、しばしここでお待ちください。よろしく頼む。

幾松が来た道に戻ろうとするのを、桂が呼び止める。

幾松 桂
はい。幾松！

桂 世話をかけるな。
幾松 いえ。すぐに戻ります。
桂 うん。

幾松去る。下手からほろ酔い気分の新撰組隊士たちが登場。

隊士 1 おい、その乞食。

桂動かない。

隊士 1 お前だ、乞食。

桂 ……あつしのことでごぜえますか？
隊士 2 お前、今あの女と何の話をしていた？

桂 ……いえ、別に。

隊士 1 乞食が芸者の女に何の用がある？

桂 いえ、用などございません。

隊士 2 もしやお前は長州の生き残りか？ 昔の女にたかっていたか？
桂 滅相もございません。

近藤と沖田、下手より登場。

近藤 どうした？

隊士1 これは局長。怪しい乞食を尋問していたところです。

隊士2 ひよっとして長州の落ち武者かもしれませぬ。

近藤 この乞食、何をした？

隊士1 さっき女と話をしました。

隊士2 それに、なんとなく堂々としてます。

近藤 はは。堂々とした乞食か。

沖田 局長、この男、もしや……

近藤 桂に似ているか？

沖田 ええ。

隊士1 実は私もそう思ってたんです。人相書きに似ているなど。

隊士2 間違いありませんぜ。

近藤 これはおもしろい。長州の巨魁きよかい桂小五郎が賀茂かもの河原の乞食に化けた

か？ それとも桂は乞食に成り下がったか？

沖田 おい乞食、名はなんという？

桂 コースケでございます。

沖田 生まれはどこだ？ なぜここにいる？

近藤 やめておけ。そんな質問は無駄だ。(刀を抜いて) さあ、これを見る。

桂 どうだ、血が騒がんか？

近藤 滅相ありません。

桂 見るだけではなく、手に取ってみろ。どうだ、桂君、君の腕なら俺たちを斬って捨てることもできるぞ。

近藤 刀をゆっくり抜いて一振り。

近藤 どうだ？ この虎徹は石灯籠いしどうろうも叩き斬れる名刀だ。さあ、これで新撰

桂 組を叩き斬ってみろ。(虎徹を持たせようとする)

桂 どうか、お許しください。

近藤 もっともこの沖田は少々手強いぞ。池田屋を覚えてるだろう？ あの

桂 とき宮部みやべ鼎蔵ていざうや吉田稔磨としまろを斬ったのがこの沖田だ。

桂 ……

近藤 (桂の顔をつかんで) さあ、顔を上げて沖田を見る。こいつがはまぐりごもん蛤御門の変で長州藩士を何十人も斬り捨てた男だ。君たちを窮地に追い込み、

君が頼りとした吉田稔麿を斬り捨てた男がここにいる。どうだ、憎い
だろ？ 放っておくと、残り少ない君の仲間を殺して回るぞ。

沖田、刀を抜く。

近藤 立て。そんな格好でこの近藤をだませると思ったか。
沖田 立たなければ、こっちから行くぞ。

沖田、桂を斬りつけようと構える。桂、刀を放り出し、土
下座をする。

桂 お助けくださいまし。お願いでございます。お助けくださいまし。
沖田 まさか心根まで乞食になり下がったわけではあるまい。お前の剣は何
のためにある？ 俺にはもう時間がないのだ。さあ、立て。立って俺
に教えろ。俺たちはいったい何のために剣を学んだ？ さあ、教えて
くれ。

桂 お許しください。
近藤 また逃げるつもりか。逃げても帰る場所はないぞ。西郷率いる三六藩

一五万の兵が長州を取り囲み、すでに長州藩の三家老は切腹した。長州藩が自らの手で君たち正義派の志士を始末しているんだ。君がかわいがっていた伊藤たちも長州藩士が襲っている。

沖田

長州藩ばかりではない。幕府、朝廷、外国艦隊の全てが桂を捕らえよと言っている。もはや逃げ場はない。せめて侍らしく、剣を取って俺と勝負しろ。あつばれな最後を飾るべく、武士として勝負するのだ。お武家様の話など、私めには、何のことやら。

沖田

まさか剣の道に意味がないと言うのか。お前には誇りがいいのか。

桂

乞食に誇りなどございせん。

沖田

こちらを向け。

桂

へえ。

沖田、桂の顔につばをかける。

沖田

見下げ果てた奴だ。

近藤

行こう、沖田。こいつはただの乞食だ。桂であろうとなかろうと、乞食であることに変わりはない。こんな男を斬っても、刀の穢れ、その身の恥だ。

隊士1 乞食。
隊士2 クズ野郎。

新撰組退場。桂、泣いている。

上手から幾松がそば屋の屋台を引いて登場。桂は屋台に気づいていない。

幾松 どうかされましたか？

桂 ん？ ああ。幾松か。

幾松 あの、食べ物をご用意いたしました。これ、おにぎりです。すまんな。後でいただく。

幾松 では、おそばになさいますか？

桂 いや、今ちよつとそういう気分じゃない。

幾松 何かあったんですか？

桂 僕は何者だ？

幾松 コースケでしょう？

桂 そうだ。乞食のコースケだ。そして本物の乞食になってゆく。そんな言い方よしてください。

桂 昔松陰先生はこう仰った。「死して不朽ふきゆうの見込みあらば、いつでも

死ぬべし。生きて大業たいぎようの見込みあらば、いつでも生きよ。」僕は死ぬ時を間違えた。

幾松 まだ大きな仕事が残っています。また、この国の夜明けは近いぞと仰つてください。

桂 今やただの乞食に勝ち目はない。

幾松 そんなに乞食がお嫌なら、別のものにおなりになれば？

桂 別のもの？

幾松 そば屋です。

桂 そば屋？ ん？（屋台に気づいて）これ、どうしたんだ？

幾松 有り金はたいて買って参りました。

桂 この屋台を買ってきたのか？

幾松 乞食よりそば屋の方が食べるのに困らないのではないかと思つて。お氣に召しませんか？

桂 いや、そんなことはないが、ただちよつと突然すぎて。

幾松 うどん屋の方が良かったですか？

桂 そんなことはない。そば屋がいい。まこと、かたじけない。

幾松 そちらに着物もご用意してございます。お着替えになつてはいかがで

桂　　しよう？　　でないと目立ってしまいますから。
そうだな。

桂、屋台の後ろに回って着替え始める。

桂　　何から何までありがたい。この恩義、一生忘れない。

幾松　お役に立てれば、うれしゅうございます。

桂　　曾太郎。

幾松　は？

桂　　これからは曾太郎と呼んでくれ。そば屋の曾太郎だ。

幾松　はい。わかりました、曾さん。

桂　　あ、曾さんって、僕のことか。

幾松　そうですよ、曾さん。

桂　　あいよ。

幾松　その調子です。

桂　　なんだか、そば屋もいいもんだな。

幾松　そう思ってくださいまし。

桂　　うん。

幾松、屋台に積んであつた三味線を取り出す。
幾松の三味線が続いている中、桂、着替えが終わり、屋台を回して少し移動し、客用の椅子を取り出す。そば屋の開店である。

幾松去り、客1(半次郎)、客2(西郷)がやって来る。

客1 暑いね。

桂 夏ですから。

客1 ちがいねえ。ざるそば、頼む。

桂 へえ。

客1 もう一年半になるねえ。

桂 何がでございます？

客1 はまぐりごもん 蛤 御門の変で、長州が追い出されてからだよ。

桂 ……そちらは何になさいます？

客1 ああ、こいつもざるそばだ。な？

客2 (肯く)

桂 少々お待ちを。

客1 ここいらに潜んでいれば幕府の隠密おんみつもやってこないだろ。

桂 いえいえ。めったなことを仰るものではございません。

客1 そうかい。そいつは気をつけなきゃいけないな。

桂 とはいえ、薩摩のお侍様なら、天下にはばかることもございませんでしように。

客1 俺たちが薩摩の侍に見えるか？

桂 はい。

客1 なぜそう思う？

桂 その指の付け根のたこです。そんなところにたこができるのは薩摩の示現流じげんりゅうだけです。

客2 おいどんは薩摩モンではごわはん。

桂 ……わかりました。へい、お待ちどうさま。(そばを出す)

客1 ありがとうよ。もし俺たちが薩摩の侍なら、なんで出石をうろついているのだと思う？

桂 そばを食べにいらしたか、それとも何か良からぬ企みをされているか。

客1 そう見えるか？

桂 冗談ですよ。

二人無言でそばを食べる。
新しい客が二人やって来る。インドネシア人風の服装をした伊藤と包帯をぐるぐる巻きにした南だ。

伊藤 ハーイ。

南 ハロウ。

桂 いらっしやい。

伊藤 かけそば、プリーズ。

南 ミー、トウ。

桂 かけそばですね。

伊藤 (客1, 2に) ハーイ。

南 ハウ・ドウ・ユ・ドウー？

客1 うっとうしいな。

伊藤 オー、リーリイ？

客1 勘定を頼む。

桂 お二人で五六文もんです。

客1 (金を出して) うまかったよ。

桂 ありがとうございます。

客2 あいがとごわす。

客1, 2 去ろうとする。

伊藤 オー！ サツマザムライ！

客1 なに？

伊藤 ヘイ、ドウ・ユ・ハブ・イモ・シヨウチュー？

客1、振り向きざま、刀を一閃。伊藤は服だけ斬られて、腰を抜かしている。伊藤の懐からピストルがこぼれ落ちる。

客1 (ピストルを拾って) 銃を取る者は銃で滅ぶ。ほれ、返してやう。

客1は伊藤の上にピストルを放り投げる。ピストルを受け取った伊藤はまた大慌てである。客1、客2去る。

伊藤 あー、びっくりした。

南 大丈夫ですか？

伊藤 うん。けがはない。

南 それにしても、すごい腕前だ。

桂 君たちの相手ではない。ああいう男に関わると、命がいくつあっても足りん。

南 しかし薩摩の連中がこんな田舎まで来るなんて、変じゃありませんか？

桂 そうだな、ここも出た方が良いのかもしれない。それはそうと、その服装はどうした？

伊藤 インドネシア人です。僕の場合目立った方が怪しまれないので。

桂 そのいい加減な衣装の陰にそんな苦勞があったのか。それにしても良いときに帰ってきてくれた。

伊藤 なんとかイギリスとの交渉に間に合って、ほっとしました。

桂 君らの英語のおかげで助かった。ありがとう。

伊藤 これも留学させていただいたおかげです。

南 南君はけがをしたと聞いていたが、ひどそうだな。もう大丈夫です。ほんと、よく生きてますよ。こいつ滅多斬りにされて、何十針も縫ったんです。

桂 なんと行ってねぎらっていいやら。君たちがいなければ、我が国は二度と立ち上がれないところだった。

南 問題はこれからです。まもなく幕府軍一五万が長州征伐にやって来ます。

伊藤 対するわが軍はたった四千。四〇分の一の兵力です。

桂 心配するな。幕府軍は未だに火縄銃だ。こっちは坂本さんのおかげでミニエー銃四三〇〇挺、ゲベル銃三〇〇〇挺を調達できた。

南 兵が四千なのに銃が七千三百挺ですか？

桂 将来を見越してのことだ。

伊藤 実は坂本さんより書状をお預かりしています。(手紙を渡す)どうぞ。

桂 かたじけない。たぶん軍艦のことだろう。……ん？ これは？

伊藤 どうかされましたか？

桂 薩摩が長州と同盟したいそうだ。

南 なんですって？

伊藤 冗談じゃない。薩摩の方から戦争を仕掛けてきたのに。

桂 薩摩の連中が下関に来ると言っている。

南 じゃあ、さっきの侍たちも桂さんと知って近づいてきたんですね。

伊藤 (手紙を取って) 何を考えているんでしょうね。あれだけ長州をたた

いておきながら、すぐにまた同盟を言い出すとは。

屋台の後ろから突然村田蔵六と山県が現れる。

村田 私は反対であります。

南 うわ！

伊藤 びっくりした！ 脅かさないでくださいよ。

南 村田先生、いつからここにいらしたんですか？

村田 ずっと前から隠れていたのではありません。

山県 実はそばにいた。

伊藤 なんでもまた？

村田 敵を欺くにはまず味方からであります。

村田 村田先生は薩摩の提案に反対ですか？

村田 薩摩は正義ではなく、権力を求めています。そういう連中はまたいつでも裏切るものでもあります。

桂 君たちはどう思う？

伊藤 久坂さんは薩摩との戦いで死にました。

南 入江君も来島の親父も、蛤御門で薩摩にやられました。

山県 薩摩と同盟など、討ち死にした友に申し開きが出来ない。

村田 とはいえ、今や薩摩の軍事力は幕府以上であります。

伊藤 それに坂本さんの顔をつぶすわけにもいきません。

南 薩摩は憎いが薩摩なしでもまた困るか。

山県 坂本さんは他に何と書いておられますか？

伊藤 「薩長土が手を結び候らえば、必ずや御一新あるべく存じ候」

村田 どうやら薩摩も土佐も、幕府を見限るつもりでありますな。

南 そうなれば幕府を倒せます。

桂 よし、どうせなら、こちらから京の薩摩藩邸に乗り込もう。

山県 それはあまりに危険であります。罾かもしれません。

村田 ありえますな。それに京には新撰組も待ち構えている。

南 桂さんに万一のことでもあれば、我らは完全に瓦解します。

桂 しかし、薩摩を敵に回して、幕府を倒せますか。

村田 それは無理であります。

桂 幕府を倒せないのなら、僕が生き延びる意味もありません。なに、西

郷は僕を殺すほど馬鹿じゃない。もしそれほど馬鹿なら、僕は国のた

めに死ねばいい。伊藤君。

伊藤 はい。

桂 坂本さんに桂が行くと、伝えてくれ。山県君と南君は高杉に連絡だ。
山県 了解であります。

桂 村田先生は僕と一緒に薩摩藩邸に行ってくださいか。

村田 お供致します。

桂 さあて、この国をひっくり返すぞ！

皆 おー！

皆でそば屋の屋台をひいて退場。溶暗。
三味線を弾く幾松。

幾松 ついておいでよこの提灯ちようちんにけして（消して）苦勞（暗う）はさせぬから

舞台奥にむしろの上に座った岡田以蔵と書状をもった役人。

役人 吉田東洋とうよう、井上佐市郎さいいちろう、京都町奉行与力四名他よりき、計一三名殺害の罪に

より、土佐勤王党岡田以蔵いぞう、打ち首を申し渡す。

以蔵 俺が守った人たちのことも言ってくれよ。

役人 以蔵、最後に言い残すことがあれば申せ。
以蔵 君が為^{ため}、尽くす心は水の泡^{あわ}、消えにし後ぞ^{のち}澄み渡るべき

役人が以蔵の首をはねる。

溶明。薩摩藩邸。西郷、大久保、半次郎、高崎と、桂、村田が向かい合っている。気まずい空気。

西郷 暑うごわんどなあ。

村田 夏が暑いのは当たり前であります。

半次郎 すいかなんぞ召し上がいやらんな？

桂 どうかお気遣い無く。

高崎 お茶はいがでごわすか？

桂 いや、結構。

半次郎 そいならば菓子なんど？

桂 いいえ。かたじけない。

高崎 カステーラもごわす。

桂 いますせん。

大久保 何か御所望^{ごしよもちう}の品はごわはんか？

桂 正義です。

西郷 ほう。

村田 すでに何度も申し上げたとおり、我らの望みは、帝の御前で長州の潔白を証明致すことであります。

高崎 そいは無理でござす。

村田 なぜです？

高崎 長州は朝敵でござす。どげん仰ろうと御所に入ることとはできもはん。

村田 そもそもそれがおかしいと言っているのです。長州がいつ朝廷に弓を引いたというのでありますか。

高崎 蛤御門の変でござす。

村田 あれは謀略であります。薩摩もよくご存じではないか。

高崎 全ては帝の詔みかど みことりでござす。

村田 ではどなたがその詔をお書きになったか。

大久保 こいは聞き捨てならん。偽の詔じゃつち仰つとでござすか。

村田 疑う根拠は十分ある。破約攘夷はやくじょういにあたっては、帝が攘夷決行と決められたはず。しかるにその命に従った長州が、なぜ朝敵になるのですか。しかも、幕府は長州を攻めた外国船を横浜で修理している。自分の国を攻めた外国船を修理する政府がどこにありますか。

大久保 確かに幕府のやり方は問題じゃつち思うちよいもす。

桂 問題どころではない。幕府は長州を外国に差し出したのですぞ。おかげでわれらはアメリカ、フランス、朝廷、幕府の全てを敵に回して戦った。こんな理不尽がありませんか？

大久保 そこが政治の不思議なところでござんとなあ。

村田 これだけ多くの血が流れて、不思議の一言で済ませるおつもりか？

大久保 亡くなったとは長州藩士だけではありもはん。薩摩隼人はやともたくさん死にもした。

桂 我々は戦いたくなかった。三年前は薩摩と行動を共にするつもりだった。

西郷 大変でござしたなあ。

桂 それだけですか？

大久保 ……まあ、ゆっくいしてたもんせ。

村田 もう一週間もゆっくりしたであります。今の話も四回目であります。

桂 仕方が無い。これ以上何も無いようでしたら、お暇致します。

高崎 お待ちください。まもなく坂本様がおいでになりもんで。

村田 昨日もそう仰いました。

高崎 今度こそ間違いないもはん。もうおいでになる頃でござす。

半次郎 焼酎でん、お飲みにならんですか？

村田 長州人は明るいうちから酒など飲みません。

半次郎 じゃっどん、陽も傾いてきました。

村田 夕方に陽が傾くのは当たり前であります。

大久保 ……まあ、ゆっくいしたもんせ。

村田 では五回目の話をするのでありますか。

不快な間を破って、坂本が入ってくる。

半次郎 坂本さあ！

坂本 お待たせしちゆう。お久しぶりやか。

高崎 やっとおいでになりもしたか。

村田 まったく大変であります。

大久保 たちいきもはん。

桂 話が違います。

坂本 わかちゆう、わかちゆう、ま、ちよくつと、待つとおせ。

桂 もうずいぶん待ちました。しかし……（薩摩から離して）しかし、話が違う。薩摩は長州と同盟する気などまるでない。

坂本

ほがなことはないがで。

村田

ではなぜ同盟の話を切り出さないのです？ この一週間というもの、西郷殿は「暑うごわんどなあ」と「大変でござしたなあ」としか言わんであります。

坂本

まっことなが？

桂

幕府も諸藩も外国も、天下はすべて長州の敵です。もとより活路があるとは思ってないが、薩摩の方から手をさしのべてくれたから、こうして京都までやって来た。しかるに薩摩は、まるで手をつけて憐れみを乞えというような態度だ。もはや防長ぼうちょうにしゅうの山河をあげて、たとえ焦土と化せしむるも、信じる道を進むだけです。

坂本

まあ、待っとおせ。(薩摩の方に寄って) 西郷さん、大久保さん。この期に及んで腹の探り合いはいかんちゃ。これでは長州がかわいそうじゃ。

大久保

今や幕府も朝廷も薩摩しだいでござす。こっつから頼むべきことはございもはん。

坂本

まだほがなことをゆうちゆうがかえ。もし今薩摩と長州がけんか別れすれば、日本は内戦、外国の思うつぼじゃ。イギリス、フランス、アメリカに攻め込まれ、植民地になるが、それでえいのか？

大久保

おいたちは内戦を始めるつもりはありもはん。そいじゃつで、こげんしてここにおいもす。

坂本

ほいたらええか、よおー聞きいや。ここにいる皆さんは、誰に命じられたわけでもなく、己が心に従い、知略ちりやくを絞り、刀や槍をくぐり抜け、国のため奔走してきた方々じゃ。正義のためなら死をも辞さぬ覚悟じゃろう。しかし、心を変えろ、心を。日本を背負う気になってみい。その気になって背負えば、日本など軽いものじゃ。そしてそれが悲しくないか。ひとつの国が老婆のように軽いのが哀れではないか。（一人一人の手を取り）西郷さん、大久保さん、桂さんと村田先生もこつちじゃ。半次郎さん、高崎さんもここに来やったもんせ。生まれ変わって、薩摩も長州もぶつつぶす覚悟で新しい国をつくやーせんか。幕府も藩も身分もない。アメリカより若い国ができゆう。

西郷

そん国はどげなもんでごわすか。まずは不平等条約の改正じゃ。

半次郎

そいは異議なしでごわす。

坂本

ほいで金銀の交換率を国際基準に合わせるきね。異議なしであります。国中が為替で大損ですから。

村田

坂本

それから戦艦と大砲を買わないかん。

大久保 そうじゃ。外国に負けん、強い国を作らんにやなりもはん。

高崎 できれば豊かで自由な国がよしごわんで。

村田 フランス革命ですな！

坂本 そうじゃ！ あしらあ、ヨーロッパに負けん国を作るんじゃ。西郷さん！

西郷 わかいもした。こいからは長州の敵は薩摩の敵でござす。

桂 薩摩隼人が味方とは心強い。

坂本 これで薩長同盟締結やか。どなたさんも異存ないきね？

大久保 異存なしでござす。桂さあ、村田さあ、よろしゅう頼みあげもす。

桂 こちらこそよろしく願ひします。

大久保 さっそく乾杯ちいつもそか。おゆう！

おゆう、奥から出てくる。

おゆう お呼びでございますか？

大久保 祝いの酒じゃ。

おゆう はい。用意できております。

大久保 もうできちよつとか？

おゆう はい。先ほど坂本様に仰せつかりました。

おゆう、女将、お梅が薩摩切子のガラスコップを持ってくる。

村田 しかし、これはまた驚きの急展開でありますな。

高崎 いや、まったく驚きでござす。あん霽囲気から薩長同盟とは思ひもよらんこつでござした。

半次郎 ほんのこてに、坂本さあがいらっしやるまで一週間も、おいたちは何をしちよつたとじやるか。

坂本 いや、皆さんのご苦勞あつてこそやか。

桂 女将ではないか？

女将 お久しぶりでございます。ご無事で何よりです。

桂 ありがとうございます。女将こそ元氣そうで良かった。

お梅 お久しぶりです。

桂 お梅さん。まさか二人とも薩摩藩邸にいたとは。

女将 店が取りつぶしになりまして、西郷様に拾って頂きました。

桂 そうか。それは申し訳ないことをした。(西郷に) かたじけない。

西郷 うんにやうんにや。おいは何も。
大久保 ささ、せいならみなさあ、乾杯しもんそ。乾杯！

一同グラスを合わせる。「よろしゅう頼んもす」などと言
い合う。

大久保 おゆう、布を仕入れてくれ。

おゆう はい。どのような布でしょう？

大久保 こんぐらいの赤い布に、この日月を金銀で刺繡した旗を作る。戦の旗じゃ。

おゆう わかりました。すぐに西陣に注文致します。(去る)

村田 日月の紋所とは、錦の御旗のことですか。

大久保 いかにも。残念ながら御所にあいもはんで、作つとでござす。こいを掲げればこつちは官軍、敵は朝敵ちなりもす。長州も掲げていただけもんど？

桂 ありがたい。それで反逆者の汚名を返上できる。

坂本 さすが大久保さん、やるのが早いのお。

村田 全く隙がないであります。

高崎 そうじゃ、坂本さあ、これを見てたもんせ。(懐からピストルを取り

出す) ほら、薩摩でもピストルを買い付けもした。

坂本 おお！ 高崎さんも、やるのが早いのお。

高崎 こいさえあれば、どげな剣豪でもおびき出してズドン！ ごわすな。

坂本 さあのピストルも見せてたもんせ。

坂本 いや、それが持っていやーせん。

高崎 どげんしたとな？

坂本 ピストルはもう古い。これからはこれで身を守るぜよ。

高崎 そいは何でござすか？

坂本 『万国公法』じゃ。

高崎 万国公法？

坂本 文明国の国際法じゃ。外国と交渉するには、万国公法は不可欠じゃ。

高崎 どげなことが書いてあつとでござすか？

坂本 大きい国も小さい国も平等に権利を持ち、海は誰のもんでもないと書いてあるがで。ほんなら、海を舞台に、新しい国が作れるぜよ。

高崎 ほう、おもしろそうでござすな。

坂本 そうじゃ。これを知らんで困つとる国はこじやんとあるけに、わしは世界を助ける海援隊になるぜよ。

大久保 相変わらず、ふっとかホラでごわんどな。
坂本 『ホラ』じゃないきに。

全員笑う。トンヤレ節の伴奏が遠く聞こえ、全員で歌う。
女たちはグラスを下げ、男たちは鉢巻きを締めたり、たす
き掛けをしたりする。岩倉、長州藩士たちも出てくる。

全員

国を追うのも人を殺すも
誰も本意じゃないけれど
トコトンヤレ、トンヤレナ
狙い外さず 狙い外さず
どんどん撃ち出す 薩長土
トコトンヤレ、トンヤレナ

長州藩士は刀を抜く。音楽。

伊藤 大島口くちに四国各藩連合軍が二万人。
南 芸州口に幕府軍の本陣あり。総勢五万人。

山県 対する長州軍はそれぞれ千人。この人数で大丈夫ですか？
村田 心配無用。ミニエー銃は三倍速く、三倍遠く打ち込めます。何人いよ

うと幕府軍は近寄れません。

伊藤 石州せきしゅうくち口に紀州藩など幕府軍総勢三万。

南 小倉口に小倉藩など幕府軍総勢五万。

山県 対する長州軍はそれぞれ千人。ほんとに大丈夫ですか？

桂 こちらにはアームストロング砲もある。あとは気合いだ！

銃声。長州藩士たち、剣の舞。銃声。薩摩藩士たち、官軍の服装にて登場。三本の錦の御旗を、大久保、桂、岩倉が掲げる。坂本はいつの間にか消えている。

岩倉 孝明天皇崩御。

大久保 帝より、討幕の密勅。

高崎 徳川慶喜が幕府軍一万五千を率いて京都に出兵。

半次郎 鳥羽伏見に集結した薩長連合、総勢五千。

西郷 ようし、出陣じゃ！

薩摩藩士たち刀を抜く。さらに激しい銃声。闇となる。
三味線を弾く幾松。かすかな明かりの中、むしろの上に正座した近藤と離れた位置に桂が浮かび上がる。

桂

君ほどの男が、なぜ幕府に仕えた？ もはや幕府に未来はないのはわかっていただろうか？

近藤

俺は剣を取ったから、幕府は俺を武士にとりたてた。この国では武士でなければものも言えん。

桂

僕は身分のない国を作りたかった。

近藤

そんな国なら良かったな。だが、君だつてただの乞食で死ぬのは、馬鹿だと思つただろうか？

桂

僕は毒薬を持ち歩いた。志を持っていれば、どんな惨めな屍しかばねをさらしてもかまわないと思つたからだ。

近藤

さすがだな。だがこれで終わりじゃない。俺が死んでも、もっと手強い相手がいる。

桂

西郷のことか？

近藤

そうだ。その時になつて初めてわかるだろう。俺が何のために幕府に仕え、何のために死んでいったか。本当の勝負はその後だ。

井の中の蛙かわず 大海を知らず、されど空の青さを知る。

近藤が首を差し出す。斬首。闇。上手に坂本。

声

坂本様、十津川郷士とつかわごうし、佐々木様がお見えになっております。ただ今名刺をお持ちします。ほうか。

坂本

意表を突いて刺客が二人乱入。

坂本

なんじゃ、おんしら。

刺客、ほんの四秒で竜馬に三太刀浴びせる。闇。下手に村田。

声

村田

村田先生、萩原俊蔵様はぎわらしゅんぞうと仰る方です。お名刺でございます。今は夜分ゆえ、会いません。公用なら明日役所へ参られるように。私用ならば明後日宿に参られるように。そう申せ。

声
はい。

刺客、村田を斬る。

舞台前面に三味線をつまびく幾松が浮かび上がる。

幾松

（都々逸） さつきやみ あやめわかたぬ 浮世の中に なくは私と ほととぎす

花だけを残して、幕。

第二幕

第一景 秋のロンドン

奥に秋の活け花。歓迎の爆竹。

華やかな音楽。日英の国旗が飾られている。

ロンドンの舞踏会。英国婦人たちと踊る岩倉使節団の岩倉、大久保、伊藤、高崎そして木戸(桂)。岩倉以外は洋服を着ている。音楽がやみ、一同拍手。

パークス

岩倉

レデイス・アンド・ジェントルメン、レットミー・イントロデュース・トゥー・ユー、デューク・オブ・ジャパン、トモミ・イワクラ。
天皇並びに日本国民に代わって、心から歓迎に謝意を表します。我が日本帝国においては、レヴオリューションがまさに進行中でありまして、さまざまなチェンジが起こっているところであります。私たちはこのイギリスの制度を詳しく研究し、その富と偉大さの源を探りたいと考えております。すでに多くの留学生がこちらに参っており、多く

の機械をイギリスから輸入しているところでありますが、こちらの産業、経済を見渡し、まだまだ多くのことを学ぶ必要があると痛感致しました。どうか今後とも一層の援助を賜り、友誼を厚くし、両国の通商が盛んとなるよう祈念致します。サンキュー、サンキュー。

拍手。再び音楽が鳴り、踊りが始まる。テーブルに置かれたワインを木戸は一人味わっている。
パークス、木戸を眺めている。

パークス

木戸孝允、またの名は桂小五郎。これほど才気煥発な男に、私は会ったことがない。話をすれば生き生きと顔が輝き、弁舌さわやかにして、体中から勇氣と決意があふれ出る。この男は、幕府が一見盤石の重みを持つていたときに志をおこし、奔走し、法の網と刀と槍と砲弾のなかをくぐり抜けた。人々が安らかな日常を送っているときに、この男のみが、まるで天命を受けるがごとく、異常の行動をとりつづけ、ついに幕府を倒すに至った。かつて反逆者として国中から追われている男が、今では新政府の代表だ。彼はまず三百年以上続いた大名たちから領地を取り上げ、三百万人の武士からすべての特権を取り上げた。

自分の主君もクビにして、侍を乞食同然にしたのだ。同じことをヨーロッパでやれば、何年も戦争が続き、何十倍もの犠牲者が出ていただろう。

ハーイ、ミスター・キド、タノシンデ、アリマスカ？

木戸 オー、ミスター・パークス。

パークス ヨーロッパノ、ダンス、イイダンス、アリマスカ？

木戸 イエス。ワンダフル。

大久保 ナイスパーティ、ミスタ・パークス。

パークス オー、オークボサン、コンニチワ。条約改正、ドウデスカ？

大久保 それが全く相手にしてもらえません。

パークス ヤッパリネ。

木戸 西洋は、最初から条約交渉する気などないのですね。

パークス アリマセン。フリダケネ。

大久保 やっぱりそうか。しかし、不平等条約のせいで関税自主権が無く、国内の産業が育ちません。

木戸 おまけに領事裁判権のせいで、外国人の犯罪も裁けない。

パークス 日本ニ悪イコト、西洋ニイイコト。条約、何十年、カワラナイ。

木戸 しかし、万国公法には主権を持つ国家は平等、対等だと書かれていま

す。

パークス ソノ国家、文明国ノコト。日本ハ文明国デハ、アリマセン。

大久保 そんなむちやくちやな。

パークス どいつノ・プライム・ミニスター・びすまろくモ、コウイッテイマス。

大国は、利があれば万国公法を使い、不利になれば武力に訴える。問題を解決するのは、万国公法や自由主義ではなく、鉄と血のみである。結局は軍事力か。

大久保 ソウイウコトデス。日本ニハ、条約改正ヨリ大事ナ外交アリマス。

木戸 それは何ですか？

パークス ろしあデスネ。樺太^{からふと}、千島、北海道、ろしあ狙ッテマス。ろしあガクルト、ミナゴロシヤ。

大久保 それは確かに問題ですが、ロシアと日本では国力に差がありすぎる。

パークス ダカラ、いぎりすノ力、借りルノデス。

大久保 どうやって？

パークス マズハ朝鮮ニ出兵シナサイ。ソシタライぎりすハ日本ヲ支持シマス。

木戸 朝鮮出兵ですと？

パークス コノママダト、ろしあハ朝鮮ヲ攻メマス。ソウナルト、日本モ危ナイ。

大久保 イギリスの狙いは？

パークス ろしあトいぎりすハ仲悪イ。

木戸 それは知っています、そんなことで外国に出兵などできません。

管楽器の音が鳴り響き、衛兵（人形でも可）が登場。人々が脇による。

パークス オー、女王陛下デス。

管楽器の音。溶暗。

舞台中央にホテルの一室が浮かび上がる。洋服姿の木戸孝允（桂小五郎）と大久保が囲碁を打っている。

木戸 どうもわからん。

大久保 そんなに悩んでも私の勝ちだ、桂さん。

木戸 木戸だ。

大久保 そうだった。今や木戸準一郎参議だ。

木戸 いや、木戸孝允だ。

大久保 ああ、そうか。なんでそんなところろ名前を変える？

木戸 これも安全のためだ。
大久保 なるほど。さすが逃げの小五郎だ。

ノックの音。

高崎の声 失礼します。

木戸 どうぞ。

高崎 東京から木戸先生宛に手紙が参っております。

木戸 ありがとうございます。(手紙を開ける)

大久保 高崎、今日は休みだったな？

高崎 はい。公務は一切ありません。

大久保 そうか。じゃあ君も休むといい。

高崎 ありがとうございます。

高崎去る。

木戸 女房からだ。

大久保 幾松さん、元気か？

木戸 元気は元気だが、困ったことになった。

大久保 何かあったか？ 顔色が悪いぞ。

木戸 僕の浮気を疑っている。(手紙を見せる) どうやら僕がこちらでもてているなどと言った奴がいるらしい。

大久保 『お噂、誠に悔しくて悔しくて、死んでも忘れ申さず、ただただ泣き暮らし候。ただただあなた様を恨み、どのようなことを致すやら知れ申さず、どうぞどうぞ機嫌の直るようなお返事をくだされ』はは。夫婦田満の証拠じゃないか。

木戸 笑い事じゃない。使節団の中にスパイがいるとしか考えられん。

大久保 スパイならたくさんいるだろう。

木戸 たとえば？

大久保 たとえば高崎だ。

木戸 え？ さっきのバツサリの？

大久保 ああ。あいつは坂本さん殺しの犯人も知っている。

木戸 まさか。

大久保 それに村田先生殺しとも関わりがあるかもしれん。

木戸 なんと！ ならばすぐに捕まえよう。

大久保 それは無理だ。

木戸 何を言っている。内務省も警察も大久保さんの管轄じゃないか。

大久保 捕まえたらどうなると思う？

木戸 どうなるって…誰が背後にいる？

大久保 薩摩の殿様、島津公だ。今の政府は、お殿様から見れば、藩をつぶした狼藉者だ。こつちが高崎を捕まえたりしたら、薩摩は分裂、この国は内戦の闇に消える。

木戸 だからといって坂本さん殺しや村田先生殺しに目をつぶるわけにいかん。

大久保 高崎は私と西郷も殺す気だ。

木戸 まさか。

大久保 命は惜しくないが、そうなると木戸さんが困るだろう？

木戸 僕が？

大久保 不平士族を抑えているのは、西郷だ。西郷が死んだり、木戸さんが西郷と対立したりすれば、抑えが効かなくなる。

木戸 僕が西郷と対立だつて？

大久保 万が一のことだ。明治政府は木戸さんと西郷が産んだ子どものようなものだ。二人が対立でもすれば、わが国は滅びる。だから私はこうして木戸さんを外国に連れ出したのだ。

木戸 それは違うだろ。僕が大久保さんを外国に連れ出したんだ。

大久保 馬鹿な。なんでそんな必要がある？

木戸 大久保さんが長州と対立していたからだ。岩倉様が見るに見かねて僕に頼んできた。

大久保 冗談だろ。その岩倉様が、西郷との対立を避けるため木戸さんを連れ出せと仰ったんだぞ。

木戸 それはつまり、どういうことだ？

大久保 はめられたな。

木戸 誰が、誰に？

大久保 さあな。ただ我々は西郷に嫌われたようだ。

木戸 あるいは好かれているのかもしれない。

大久保 岩倉様にか？

伊藤が新聞を持って部屋に入る。

伊藤 おはようございます。

木戸 おはよう。

大久保 おはよう。

伊藤 囲碁ですね。どっちが勝ってるんですか？

大久保 もちろん私だ。

木戸 (同時に) 僕だ。

大久保 それはないだろう。ここは助からんぞ。

木戸 助かってるよ。

伊藤 今朝の新聞です。私たち使節団のことが出ています。

木戸 ほう。どんなことが書いてある？

伊藤 『日本の使節団は不平等条約改正を望んでいるが、それは叶わない。

友好親善を求めてヨーロッパを歴訪することになるだろう』。

大久保 おおむね正しいな。

伊藤 ええ。まったく相手にされませんでしたね。

大久保 伊藤君はこれからどうすれば良いと思う？

伊藤 外国との交渉は何より信用第一です。日本人が西洋人と同じ文明人だ

と示さなければいけません。

大久保 問題はどうかやってそれを示すかだ。

伊藤 我々が英語を喋り、キリスト教を信じればいいんじゃないでしょうか。

木戸 なんだと？

伊藤 公用語を英語とし、天皇陛下にキリスト教の洗礼を受けて頂くのです。

大久保 それはまた過激な意見だな。

伊藤 そうでしょうか。別に日本語を禁止するわけじゃありません。ただ日

本語も日本文化も世界では通用しない。髻まげや着物もただの見世物だ。

木戸 君はそうやって日本文化をのしるだけか。

伊藤 遅れを取っているのだから仕方ないでしょう。世界が英語やキリスト

教に支配されているなら、それを使った方が便利です。

大久保 英語やキリスト教が条約改正につながる保証はあるのか？

伊藤 もちろんです。アメリカ大使も、同じ言語、同じ宗教になったら、対

等の条約を結ぶと言ってくれています。

木戸 日本語も日本人もなくなっていくというのか。

伊藤 西洋人になって生きのびればいいじゃないですか。「こんにちは」の

代わりに、「ハイイ！」と言い、念仏の代わりにアーメンと言うだけ

です。それで国が豊かになるなら、どうということはないでしょう。

木戸 では、もしアラブが栄えたら、天皇陛下に「アラアアクバル」と言っ

て頂くか？

伊藤 そういうこともあるかもしれませんが。

木戸 そんな国民が信用されると思ってるのか。節操のなさ、誇りのなさを

笑われるだけだ。

伊藤 しかし現に日本は西洋諸国をまねるしかない。

木戸 君はなんのために豊かになって、何を守りたいんだ？

伊藤 そんなことは豊かになってから考えればいい。食うや食わずの庶民には、文化なんか、無駄な贅沢品です。

木戸 何もかもとつかえひつかえ。まるで誰かさんの女あさりだ。

伊藤 女とは関係ないでしょう。

木戸 覚えておくがいい。君のように親友の妹と離婚し、再婚した妻の目の前で、別の女を自宅に引き入れるような男ばかりではないのだ。西洋から学ぶことはあっても、どの国にだって守るべき伝統や文化がある。私は、意見を言えと言われたから言ったままでです。それなのに、女のことまで言われるとは我慢なりません。

大久保 よくわかった。スパイは伊藤君だな。

伊藤 は？

ノックの音。

高崎

失礼します。長州出身だという男がやって来ました。南貞助と名乗みなみていすけっていますか、ご存じですか？

木戸 もしろん。高杉晋作の従兄です。
伊藤 共に幕府と戦いました。
高崎 そうでしたか。ではお通しします。

南、ライザを連れて入ってくる。

南 お久しぶりです！

木戸 おー、よく来てくれた。

伊藤 元氣そうだな。貞ちゃん。

南 おかげさまで、何とかやっています。

木戸 そうか、そうか。

南 お二人ともお元氣そうで何よりです。

木戸 そうだ、大久保さんは知っているかな？

南 初めまして。南貞助です。

大久保 大久保利通です。

伊藤 こちらは高崎正風まさかぜさんです。

高崎 高崎です。

南 南です。

大久保 こちらの女性はもしや？

南 ご紹介致します。妻のライザです。

ライザ How do you do?

木戸 How do you do?

伊藤 結婚したのか？

南 ええ。先週籍を入れました。

伊藤 これはたまげた！ 君は高杉家の跡取りではなかったか？

南 だから結婚したんです。これからは西洋人とビッグな子孫を作らなきゃいけません。

伊藤 しかし、西洋人と結婚なんて、日本では認められんぞ。

ライザ Is he talking about our marriage?

南 Well, he says there's no law in Japan for international marriages.

ライザ Really?

大久保 西洋人になるのなら、イギリス人と結婚しても良かろう。

伊藤 まだようやく武士と平民の結婚が許されたところです。外国人との結婚は法律ありませんし、時期尚早しやうそうかと。

木戸 じゃあ君が法律を作ればいいじゃないか。

伊藤 はあ。

大久保 おめでとう。君たちが国際結婚第一号だ。

南 Don't worry, Honey. They will arrange everything for us.

ライザ Oh, thank you so much!

南 ありがとうございます。

木戸 おめでとう。これで高杉家も安泰だ。

大久保 南君はこちらでどんな仕事をしているんですか？

南 銀行員です。アメリカン・ジョイント・ナショナル・エージェンシー

という大銀行で、ニューヨークやボストンにも支店があります。良かったら使節団の資金も運用致しますよ。

伊藤 運用？

南 使節団の予算はいかほどですか？

高崎 一〇〇万円です。

南 すごい予算だ。まさかそれだけの資産を金貨でお持ちではないでしょうね？

高崎 金貨でないと、こちらで使えないでしょう？

南 もったいない。もしうちに預けて頂けば、ひと月で一〇五万円にはなりませんよ。

大久保 そんなに儲かるものなのか。

南

はい。しかもうちのような大銀行なら取られる心配もない。そうだ、ロンドン見物をかねて、株式市場をご覧になりませんか？ 僕らがご案内致します。

木戸

それはありがたい。今日は鬱鬱^{うつうつ}していたところだ。皆でロンドン市内に繰り出しますか？

大久保

いいだろう。では馬車の用意を頼む。

高崎

はい。

高崎、伊藤、馬車の客車に見立てた箱を出してくる。そこに一堂座る。音楽と共に、ロンドンの名所が登場。馬車の後ろに映像が映されても良いし、模型や絵でもよい。

高崎

あ、そういえば岩倉様のこと忘れてませんか？

大久保

いいんだよ。あの方をお呼びすると、ややこしくなる。

南

皆さん、よろしいですか？ それでは、出発進行！

ライザ

こちらに見えますのが、ウエストミンスター寺院でございます。

伊藤

なんだ、日本語できるんですか。

南

機嫌が良いときは。

伊藤 ああ、なるほど。

ライザ こちらは大英博物館でございます。エジプトのミイラや副葬品、それからピラミッドもあります。

高崎 ピラミッド？ そんなもの、どうやって持ってきたんですか？

ライザ ピラミッドだけに、工夫くふう王で。

高崎 おお、なるほど。

ライザ 他にもギリシャ・ローマの美術品、バビロニアのハンムラビ法典など、見所満載。ですが次行つていいですか？

木戸 あ、どうぞ。

ライザ 左手に見えますのが、セントポール寺院でございます。ここではロイヤル・ウエディングも行われます。

大久保 ほう。

ライザ それからあの角のチョコレート屋さんは最高に美味しいですよ。

高崎 チョコレートとは？

ライザ これです。滋養を与え、精神を補う効果があります。お一ついかが？
(皆にチョコを配る)

大久保 ありがとうございます。

伊藤 真っ黒ですな。

南 まあアンコみたいなものです。

大久保 ほう、これはまた上品な味だ。

高崎 うん。なんか力がわいてきそうですね。

木戸 このねっとりした感じがいいね。

伊藤 全く同感です。

南 あちらをご覧ください。あれがロンドン証券取引所です。

ライザ 鉄道、運河、鉱山、保険など、あらゆる会社が株式公開をしています。

何しろここは世界の資本主義の心臓ですから。

高崎 ドクンドクン、ですね？

ライザ こちらは国債市場です。

高崎 国債とは？

ライザ 国の借金です。先進国はみな国債を出して資金調達しています。

高崎 日本も国債を発行できますか。

南 もちろん。

大久保 だったらそれを元手に鉄道を敷けるな。

南 良いと思います。どうです？ まず是我が社で市場を体験しません

か？

大久保 わかった。だが公金はまずいから、我々の持ち金をお願いしよう。日

高崎 本にある分をこちらで立て替えたとして、いくらぐらいになる？
全員のものを合わせれば十万円ほどになると思います。

高崎 南 十万円ですと、ひと月で五千円以上利息が付きます。

高崎 すごい。どうすればいいんですか？

南 書類にサインして頂くだけです。帰ったら詳しく御説明いたします。

高崎 高崎 かたじけない。

南 高崎 こちらこそよろしくお願いします。

伊藤 日本にも証券取引所が必要ですね。

木戸 南 そうだろうな。

南 さて、次はどこに行かれます？ シェイクスピアでもご覧になりますか？

大久保 それは昨日見た。

木戸 ここがわかるか？（紙を渡す）

南 ええ。わかります。

木戸 是非連れて行ってくれ。

南 ではアヘン窟に向かいます。

伊藤 アヘン窟ってなんですか？

ライザ アヘンを吸ってラリパツパになった人でいっぱいのスラム街です。

高崎 なんだってわざわざそんなところに？

木戸 イギリスの悪いところも見ておきたいので。

大久保 木戸さんらしいが、あまりうれしくないな。

木戸 失敗から学ぶのはとても大事です。たとえば、ポーランドをご存じか？

大久保 ポーランド？ よく知らん。

木戸 歴史も文化もある国ですが、今ではロシアやドイツに侵略されています。

大久保 なぜそんなことになった？

木戸 国家に憲法がなく、人民に権利がなかったからです。ポーランドには外国支配を防ぐ憲法がなく、外国資本と外国軍が流れこんだのです。

大久保 それは今の日本と変わらんじゃないか。

木戸 その通り。憲法の有無は国家の興亡こうぼうを左右します。

大久保 わかった。しかしポーランドのことまでよく知ってるな。

高崎 あの、チョコレート、まだありますか？

ライザ ええ、ありますよ。はい、どうぞ。

南 チョコレートがお気に召したようですね？

高崎 お恥ずかしい。これはやみつきになる味ですな。

伊藤 確かに、次々食べたくなります。

南

でも食べ過ぎると鼻血が出ますよ。

高崎

へえ、そうなんですか。まるでスップンの生き血ですな。

大久保

スップンで鼻血は出んだらう？

高崎

え？ 私は出ますが。

大久保

変わってるな。

伊藤

あ！ ちよつと、ほんとに鼻血が。

高崎

大丈夫ですか？

伊藤

いや、大したことはありません。

木戸

しっかりしてくれよ。

伊藤

すみません。すぐに収まりますから。

ライザ

お取り込み中申し訳ありませんが、その角を曲がると、イーストエ

木戸

ンドのチャイナタウンです。

ライザ

ここにアヘン窟があるんですね？

はい。ちよつと怪しい感じ、漂ってきませんか？。

アヘン中毒者が陰にうごめく。男も女も台の上に寝そべつてアヘンを吸っている。使節団の一行は辺りを見回す。

高崎 この煙がアヘンですか？

ライザ ええ。ここではアヘンの売買が公認されています。

伊藤 みんながりがりに痩せかけて、ちっとも動きませんね。

ライザ 動けないのです。自分ではアヘンも吸えないから、店員が吸わしてあげるのです。

大久保 なんと浅ましい商売だ。

南 経営者はたいてい中国人で、吸いに来るのはイギリス人やインド人です。

高崎 つまりアヘン戦争の仕返しですな。

伊藤 こんなものが広まったら大変なことになりますね。

高崎 全くだ。政府は取り締まらないのですか？

南 禁止すれば暴動が起こります。何しろアヘンの消費量は年々増えていますから。

大久保 これは我が国も用心せんといかんな。

ライザ 降りてご覧になりますか？

木戸 いや、もう十分だ。ありがとう。

ライザ ではこのまま抜けて、ウォータールーの方に向かいますか？

伊藤 そこに何があるのです？

ライザ 駅です。ロンドンでも一番乗客が多いのがウォーターloo駅です。先

ほど鉄道の話をされていたので。

大久保 それはぜひ見ておきたい。

伊藤 あの線路がそうですか？

ライザ はい。そうです。

南 おや？ 妙だな。あんなところに女がいます。ほら、あの鉄橋の上。

南が指さす方向に女がいる。

伊藤 なんで鉄橋に女がよじ登っているんだ？

高崎 ちよつと危くないですか。

ライザ 頭がいかれてるのかも。

木戸 いかれてるとは？

列車の近づく音。ライトがまぶしい。警笛。

南 列車が来ましたよ。

伊藤 やっぱり、危いでしょ。

高崎 まさか、死ぬ気じゃないでしょうね。

木戸 そのまさか、じゃないか。

ライザ オー、マイゴッド。

大久保 いかん、列車を止める。

全員 あー！

列車の過ぎ去る音と逆光。暗転。

*

ロンドンのホテル、木戸の部屋。木戸は頭を抱えてソファで横になっている。伊藤が登場。

伊藤 失礼します……お休みですか？

木戸が無反応なのを確かめて、木戸の机の上の書類をじつと見ている。

木戸 のぞき見はいかんだろ。

伊藤 起きてられたんですか？

木戸 いや。頭痛がひどくて起きてられん。

伊藤 長いですね。医者はなんと？

木戸 人に会わずに静養しろと言われている。

伊藤 それは無理ですね。……新聞、ご覧になりました？

木戸 何か良い記事でもあったか？

伊藤 あの鉄橋で自殺した女が載っています。まだ二〇才はたちだったそうです。若いな。

伊藤 アイルランドからアメリカに渡ったが仕事がなく、ロンドンに戻ってきたそうです。金に窮し、売春婦をしていたらしいです。

木戸 これだけの文明国に、そんな不幸があるとは。

伊藤 全くです。イギリスにも光と影があるのですね。

木戸 最近つくづく疑問に思うのだが、西洋に学べばそれで幸福になれるのだろうか。

伊藤 といいますと？

木戸 今や瞬時にして日本とロンドンで電信を交わせるし、まもなく鉄道で日本国中を駆け巡れるようになる。しかし、なぜ電信や鉄道が必要か、その根本を見極めなければ、開発のための開発に追いまわされて、やがて人々も国家も疲弊ひびし、ついにはあの女のようになりはしないか。

伊藤 それでも開発を続けるしかないのです。資本主義の世界では。
木戸 そこから逃^{のが}れられんのか？

ノックの音。高崎と大久保だ。

伊藤 どうぞ。

高崎 失礼します。木戸先生、お加減はいかがですか？

木戸 頭が割れそうで、吐き気がする。

大久保 それは大変だ。医者はなんと？

木戸 人に会うなと言われている。

大久保 それは無理だ。

木戸 で、何かあったのですか？

高崎 例の鉄道のための国債発行の件です。東京から資料を取り寄せました。

木戸 私の机の上に置いてください。そしたら伊藤君が確認するでしょう。
高崎 わかりました。

伊藤 鉄道が敷けて産業が育てば良いんですが。

大久保 そうならなきゃ、やっトレイン。

ノックなしでいきなり南が入ってくる。

南 申し訳ありませんでした！

伊藤 どうした？

南 この南貞助、一生の不覚でございました。

大久保 何があったのです？

南 バブルがはじけました。ウィーンとニューヨークの証券取引所が閉鎖

され、イギリスもパニックです。

伊藤 それはつまりどういうことだ？

南 連鎖的に倒産するということです。ユニオン・パシフィック鉄道、ノ

ーザン・パシフィック鉄道があいついで倒産し、そのあおりでわが社

も破産です。

伊藤 破産？

南 はい。取り付け騒ぎになっています。

高崎 我々の預けた金はどうなる？

南 残念ながら戻ってきません。

高崎 なんだと？ 一二万五千円がパーだとか？

南 はい。

大久保 十万円じゃなかったのか？

高崎 この男が絶対に安全だと言うから、使節団員の全財産をかき集めたのです。いったいどうしてくれる？ あんたは一瞬で百人を一文なしにしたんだぞ。

南 申し訳ありません。まさかこんなことになるとは……かくなる上はこの場で死んでお詫び致します。

南、ナイフを取り出す。皆でそれを抑えて止める。

大久保 止めなさい。君が死んでも何にもならん。

南 お許しください。せめて死んでお詫びせねば面目が。

伊藤 いいから落ち着け。
南 しかしそれでは……

もみ合う中、南のナイフがドアの方に飛んで行く。

ナイフの刺さった齧を持った岩倉登場。

岩倉 あぶな！ なにしますのや！ ほんま、あぶないやおませんか。

高崎 これは岩倉様。お怪我はございませんか。

岩倉 怪我はないけど、見てみい、鬚に当たったわいな。

南 申し訳ありません。

伊藤 岩倉様、ご無礼をお許してください。実は銀行が取り付け騒ぎになったのです。

岩倉 なんやて？

木戸 南君、連鎖倒産ということは、イギリス経済も危ないのか？

南 はい。世界的なデフレが起きて、失業者が増えるでしょう。

木戸 するとどうなる？

南 各国は帝国主義を強め、植民地拡大に躍起になると思います。私が言うのも何ですが、おそらくこの後もつと大変なことが起きます。

木戸 そうか。一度や二度の破産など大したことではない。これを教訓に君は経済を学んでくれ。

南 本当になんと申し上げていいやら。

岩倉 なんや？ もつと金利が付くんかいな？

木戸 後で詳しくお話します。今は頭痛がひどくて。

岩倉 そういや木戸さん、病気でしたな。医者はなんと？

木戸 人に会うなと言われてます。

岩倉 それは無理や。東京からこんな電報が来たよつてに。(電報を渡す)

木戸 なんですか？

岩倉 西郷が陸軍元帥げんすいとなり、山県が陸軍卿きようとなった。

木戸 それはまずい。

高崎 なぜまずいのです？

木戸 政治家が軍の役職を兼ねることになるからです。軍人が政治を動かすなど、危険きわまりない。

岩倉 確かに危険や。西郷は朝鮮半島に行くと言っているし。

伊藤 朝鮮に？ 何ですか、それ？

岩倉 ロシアを抑えるため、征韓論せいかんろんをぶち上げていらっしゃるらしい。

高崎 今外国に出兵する余裕はないでしょう。

岩倉 あるわけないわ。そやから東京の事務方がほんまに戦争してええかどうか、問い合わせてきとるんや。

伊藤 そんな、ロシアと張り合おうなんて無理でしょ。

高崎 無理です。日本なんておびき出されて、ドカン！ ですよ。

岩倉 そんなことはわかっとる。問題は誰が西郷を止められるかや。

大久保 それは木戸さんしかおらん。

木戸 ちよつと待ってくれ。僕が西郷と対立してはまずいんだろ？ それに

西郷は僕の言うことなどきかん。

大久保 他のものの言うことなど、なおさら聞かん。

岩倉 木戸さん、まるからも頼む。西郷を抑えるにはあんたしかおらん。それに、台湾とも戦争になりそうや。

木戸 なんで台湾とまで？

岩倉 台風や。台風のせいで琉球の船が台湾に漂着し、乗組員五四人が殺された。台湾の先住民族が逃げる乗組員の首を次々はねたらしい。

高崎 いきなりバツサリ！ ですか？

岩倉 うん。当然中国政府に謝罪と賠償を求めたが、拒否されたそうや。

伊藤 しかし、朝鮮に台湾とは、とんでもない大戦争になる。

岩倉 ほんま、我が国の外交は問題だらけや。

大久保 いずれにせよ、すぐに帰国しよう。高崎、船の用意を頼む。

高崎 はい、承知しました。

大久保 台湾は私が担当する。木戸さんは西郷を止める方法を考えておいてくれ。

木戸 (頭を抱える) 朝鮮に台湾にロシアか。頭が痛い……

ライザ登場。部屋はもうすし詰め状態だ。

ライザ Darling!

南 ライザ。

ライザ Are you OK ?

南 うん。これから帰国することになった。一緒に来てくれるかい？

ライザ オー、芸者ガールに会えるか？

南 もちろん。

ライザ Great！ でも仕事はどうするの？

南 それは……

木戸 心配するな。三井の番頭さんに話してみる。

ライザ How nice of you!

ライザ、木戸に抱きつく。木戸が倒れ、皆駆け寄る。ライザが木戸を膝枕で気遣う。

ライザ Oh, no!

伊藤 どうしました？

木戸 いや、ちよつとめまいがしたただけだ。

ライザ Please lie down here.

大久保 医者を呼ぼう。

木戸 医者なら今朝診てもらった。

大久保 そうか。しかし顔色が悪いぞ。

木戸 だから、ちよっと一人にさせてくれれば治る。

パークス、部屋に入ってくる。

パークス 木戸サン。

木戸 これは、ミスター・パークス。どうされました？

パークス 大変です。どいつトロろしあガ同盟シマシタ。

大久保 それは強力な軍事同盟ですな。

パークス コレデ樺太ハ、ろしあノモノデス。

頭を抱える木戸。暗転。

第二景 冬の日本

奥に冬の活け花。風の音。

薄暗い中、岩倉が刺客たちに襲われるがよく見えない。岩倉は逃げ惑い、闇に隠れる。

刺客 1 岩倉はどこだ？

刺客 2 一撃を食らわしたから、そう遠くには行けまい。

刺客 1 手応えはあったのか？

刺客 2 ああ。腰に一太刀食らわせた。公家のくせにしぶといやつだ。

刺客 1 手分けして探そう。早くせんと、取り逃がしてしまう。

刺客 2 そうだな。あっちを頼む。

刺客 1 わかった。

暗闇の中、提灯をもった大久保と半次郎とおゆうが歩いてくる。大久保と半次郎は洋服。

おゆう 何か物音が致しませんでした？

半次郎 確かに。

大久保 まだこの辺りにいるな。

おゆう 岩倉様は大丈夫でしょうか。

大久保 悪い予感がする。おゆう、私から離れるな。

おゆう はい。

大久保 この治安の悪さは何とかせんとな。

暗闇の中から、手負いの岩倉が飛び出てくる。

岩倉 あかん。もう死ぬ。

大久保 岩倉様！

半次郎 大丈夫ですか？

岩倉 腰を、やられた。

おゆう まあ、大変。

岩倉 腰と、鬚も切られた。もうあかん。

おゆう しっかりしておくれやす。

岩倉 (おゆうにしがみついて) おゆうさん、おおきに。

大久保 岩倉様、腰を見せてください。

岩倉 もう死ぬ。

大久保 ほう、これはよかった。刃やいばがお腰の短刀に当たっています。

岩倉 怪我は？

大久保 ありません。

岩倉 そうか、怪我はないか。

おゆう たいしたことのないよかったですなあ。

岩倉 うん、よかった。おゆうさん！（抱きつく）

半次郎 本当に運のお強い方だ。

おゆう この羽織はどうされたんです？

岩倉 暗闇に紛れよと思て、裏返して、こないして隠れてたんや。

大久保 さすが岩倉様。

半次郎、刀を抜く。

大久保 どうした？

半次郎 ひと思いに楽になつて頂きましたよう。

岩倉 なんやて？

半次郎 痛い思いをされぬよう、介錯かいしゃくさせて頂きます。

岩倉 介錯で、傷は大したことないで。

大久保 そういうことか。半次郎、おぬしも岩倉様を狙っておったか。

岩倉 なんやて？

半次郎 今更理由は申すまでもないでしょう。二年近くも日本を留守にしていなくせに、帰ってくるや西郷先生を政府から追い出した。

岩倉 何を言う。半次郎はんに西郷さんにも、政府にいてくれと再三頼んだではないか。

半次郎 この国はもう一度生まれ変わらなければいけません。

大久保 そうか。狙いは岩倉様だけではないな。

岩倉 というと？

大久保 まさか女の命はいるまいな？

半次郎 おゆうさんは後でお送り致します。

大久保 それを聞いて安心した。では岩倉様、参りましょうか。

岩倉 へ？ どこへ行くんや？

大久保 ここで立ち話しても埒はあきません。半次郎も私と岩倉様を斬って

半次郎 終わりでは無いでしょう。おおかた西郷は木戸さんのところか？
はい。

大久保 では暴れたければ木戸さんのところで好きに暴れるがいい。

半次郎 わかりました。そう致しましょう。

大久保 おゆう、参るぞ。

おゆう はい。

岩倉 あかん、もう死ぬ。

おゆう しっかりしてください。

半次郎、刀をおさめる。全員退場。

舞台奥に木戸邸の洋室。木戸、西郷、高崎、伊藤、山県が
いる。皆、軍服など堅い服装だ。

伊藤 お茶などいかがですか？

高崎 いや、結構。

伊藤 カステーラなどは？

高崎 ありません。

伊藤 それではチョコレートは？

高崎 ……お構いなく。

木戸 西郷さん、どうあっても、朝鮮に行かれるおつもりか？

西郷　そんなとおりでござす。

木戸　しかし朝鮮は江戸幕府としか交流しないと云っている。まともに話
のできる相手ではない。

伊藤　話どころか、日本の使節は斬り捨てると云っています。もし朝鮮に行
かれるなら、軍隊を出動すべきです。

西郷　おいは戦争をしたかわけではござはん。兵隊など無用でござす。
しかし朝鮮で西郷先生の身に何か起きれば、戦争になり、それを口実

伊藤　にロシアが攻めてきます。

山県　ロシアが来れば、北海道を占領されます。相手を間違っ
てはいけません。

伊藤　そのとおりです。どうせなら、勝てる相手とやるべきです。たとえ
台湾なら軍隊もいないし、ロシアも来ません。

木戸　ちよっと待て。君は何を言っているのだ？　戦争などもつてのほか
ぞ。

伊藤　わかつてます。でも、負け戦より勝ち戦がいいでしょう？

西郷　ふふふ……
伊藤　何がおかしいのです？
西郷　失礼。ただ、弱い者いじめがお好きなようでごわすな。

大久保、半次郎、岩倉登場。新撰組隊士1を連れている。
隊士1は顔中に殴られた跡がある。

岩倉 もうびつくりどつせ！

高崎 岩倉様！ 如何なさいました？

岩倉 襲われた！ 暴漢に襲われたんや！

山県 お怪我はありませんか？

大久保 幸いかすり傷一つない。お腰の短刀に刀が当たっただけだ。

岩倉 ほんでこの半次郎はんが、まろを襲うんや。

伊藤 どういうことです？

半次郎 真相はその反対だ。岩倉様の放った密偵が、西郷先生の暗殺計画を白状した。

山県 なんと！ 岩倉様が西郷先生を暗殺するのでありますか？

伊藤 まことですか？

岩倉 いやいや、なんかの間違いやろ。

半次郎 この期に及んで白々しい。大久保さんもご存じのはずだ。

大久保 いや。わしは知らん。

半次郎 では、この男に見覚えがおありでしょうか？

隊士1を差し出す。

木戸 その顔、どこかで見覚えがあるぞ。

半次郎 もちろんご存じのはずだ。泣く子も黙る新撰組隊士ですから。

山県 新撰組の生き残りですか？

隊士1 生き残ってはいかんか？

高崎 なるほど。薩長に恨みを持つ連中なら刺客にぴったりだ。

木戸 この男、何をしでかした？

半次郎 西郷先生のお屋敷の様子を密かに探^{さぐ}っていた。しかもこやつ、内務省の役人だ。

木戸 内務省といえば大久保さんの管轄だ。

山県 で、その男は西郷先生のお屋敷で何をするつもりであったのですか？

半次郎 西郷先生を刺殺せよとの命を受けていた。相違ないな？

隊士1 ああ。岩倉様のご命令だ。

岩倉 それはなんかの間違いや。そや！ シサツちうても、殺す方のシサツ

やなくて見る方のシサツや。な？

半次郎 (笑って)なるほど。そんなだじゃれで逃げられるとお思いか！

半次郎が刀を抜いて、隊士1を斬る。

岩倉 ひええ！

木戸 おやめなさい。これ以上は僕が許さん。

半次郎 止めるなら、木戸先生も敵と見なしますぞ。

木戸 甘く見ない方がいい。高崎さんはピストルを持ち歩いている。

半次郎 大久保さんもお持ちのよう。

大久保 ほう。よくわかるな。しかし誰が誰を狙っているのか、わかるまい？

高崎 やってみますか？

木戸 いい加減にしないか。

半次郎 仕掛けてきたのはそっちの方だ。

岩倉、腰の短刀を抜いて西郷の首にあてる。

岩倉 動くな！ 動いたら西郷の命をもらうぞ！

半次郎 卑怯な真似を。

岩倉 西郷の命が惜しくば、刀を捨てよ。

高崎 岩倉様、そんな生つちよろいことはやめて、ズバツとやりましょう。

(岩倉に銃を向ける) さもないと、ご自身の御身にも、バキユンですぞ。

岩倉 ちよつと、高崎はん、誰を狙ってますのや。

高崎 さあ、どちらだと思えますか？

半次郎 やはり、島津の殿様の差し金か……

高崎 だとしたらどうする？

伊藤 だとしたら、そのまま捨て置けませんね。(高崎に銃を向ける)

半次郎 ほう、これはおもしろい展開だ。

高崎 刀でピストルに勝てるか？

半次郎 やってみたらどうだ？

大久保の銃が火を吹き、高崎が銃を落とす。半次郎に向けられる瞬間、半次郎が刀で払い落とす。西郷は座ったまま岩倉の手をとり、逆ねじを食らわしている。その間に山県が刀を抜いて木戸を襲うが、木戸はあつという間に刀を奪い、伊藤の銃を払い落とす。

伊藤たち
いて！

岩倉
いたたた、何しますのや！

半次郎
(木戸の刀を払い) チェストー！

半次郎、激しく打ち込むが、木戸は優雅にかわす。木戸の刀が半次郎ののど元で寸止めされている。

西郷
そいまででござす。銃も刀をおさめてたもやんせ。

木戸、刀を山県に投げ返す。全員銃や刀を収める。

木戸
どういふことだ？ なぜ僕を狙った？ 伊藤君や山県君まで、なぜ僕を狙う？

山県
木戸先生が戦争に反対されるからです。

木戸
バカな。戦争にはみんな反対だろう。

山県
できれば避けたいであります。しかし、もはや避けられぬ情勢です。

木戸
伊藤君は、どうなんだ？

伊藤 私も山県と同じ意見です。台湾なら何とかあります。

木戸 なんということだ。戦争したさに、僕を消そうというのか？

伊藤 考えた上でのことです。このところ佐賀の乱、神風連しんふうれんの乱、秋月あきづきの乱、萩の乱と、立て続けに乱が起きています。外交問題で弱腰な態度を取れば、国内の不満を抑えきれません。

木戸 戦争で国がまとまるというのか？

山県 はい。すでに長崎には兵が集結しています。今更これを押しとどめれば、その刃は政府に向かいます。

木戸 それは、大久保さんの意見か？

大久保 そういうことだ。心配せんでも大きな戦いくさにはならん。台湾には軍隊もないし、兵を送り込んだら、私が出向いて収めるだけだ。

木戸 なるほど。いつもながら用意周到な根回しだ。あれほど皆で戦争反対と言っておきながら、いざとなるとこぞって台湾出兵か。

山県 これもお国のためであります。

木戸 国のためと言いなながら、新撰組は人を斬り、斬られていった。今君たちは国のためと言いなながら、戦争をして生き残ろうという。僕には新撰組の方がまだ信じられる。

岩倉 そんな古い話、今更どうでもええやろ。木戸さんの他に反対の者はお

らんのやから。

木戸

わかりました。そういうことなら僕は政府を去ります。

大久保

それはなりません。木戸さんには政府にとどまって頂く。

木戸

なぜだ？ 僕がいない方が、意のままになるではないか。

大久保

木戸さんが下野したら、反乱が起きる。

岩倉

そういうこっちゃ。木戸さんにはどうしても政府を支えてもらわんと困るんや。

木戸

さもなくば、いつそ殺してしまおうというわけか？

大久保

そこまで言うな。ただ任せてくれればいいんだ。

木戸

ようくわかった。しかし、戦争の片棒は担げん。ならぬと言うなら、この首、取ってごらんなさい。

西郷

お待ちください。木戸先生、おいも、台湾や朝鮮と戦をすることには反対でござす。

山県

は？ 西郷先生が反対でありますか？

岩倉

そらおかしい。もともと西郷はんは、征韓論を唱えていたやないか。

西郷

おいは戦はしとうなか。闘う理由もありもはん。

山県

どうしてです？ 台湾なら確実に勝てます。

西郷

恥を知りなさい。我が国は弱そうな国を狙う盗人でござすか？ 交渉

伊藤 もろくにせず、台湾に出兵する大義名分がどこにござす。
しかし西郷先生が仰っていた朝鮮特使とどこが違うのです？
結局戦争になるのは必定ひつじょうであります。

西郷 問題は朝鮮でも台湾でもなく、西洋列強でござす。このままアジアが

西洋の植民地なつてゆくのを放つておいて良いのでござすか？

伊藤 仕方ないでしょう。文明国が後進国から略奪する。それが現実です。
西郷 皆さんは西洋が文明国だという。しかしおいは野蛮国であるち思うて

おいもす。西洋人は何世紀にもわたつて弱小の国をいじめ、侵略し、
略奪してきました。ヨーロッパにおつたはずのロシアが、いつの間
にか中国の東に領土を持ち、アジアは西洋に取り囲まれ、搾取され、文
化も誇りも踏みにじられた。これが文明国のすることでごわすか。本
当の文明とは、未開の国があれば、慈愛を示し、懇々こんこんと説諭せつゆして開明
に導くべきもんじゃありませんか。他人を尊重し、弱者をいたわるこ
とができなん文明なんです、何の価値がござすか。

伊藤 まさか、西郷先生は西洋と戦いくさをされるおつもりですか？

西郷 おいが申し上げておいもすのは、日本と朝鮮、中国が協力体制を作り

あげ、西洋と対峙たいじすることでごわす。

木戸 そんなことができるのですか？

西郷

はい。清しんの左宗棠さそうとう（ツオツァンタン） 将軍と話は付けてあいもす。

高崎

中国の将軍と交渉されたのですか？

半次郎

左宗棠さそうとう将軍はこう仰うやうやっている。「ロシアが中国に食指を伸ばせば、北京はもはや安全ではない。もし日本が朝鮮に軍隊を派遣し、

ロシア積年の野心をくじくことができれば、東洋に同盟百年の大系がうち立てられよう。しかし、万が一、日本が西郷の計画を空しくし、これを葬くわるようなことになれば、その損失はアヘンの害の比ではない」 壮大な話ですが、中国や朝鮮と軍事同盟を結べば、イギリスやアメリカも黙もくっておりません。

高崎

伊藤

それに経済的にも不可能です。すでに外債が五百万円あり、返済のめどもない。

西郷

国は会計で成りたつもんじゃありません。高き、見えざるもの、颯爽さつそうとした魂に国家はありません。今の我が国は、これを失い、品位のない国家となり果てた。立身出世主義の官僚と、利権と投機に目の色を変かえる資本家が国を左右し、その国民たるや、日々の暮くらしに汲々きつとしておる。そげな国家を作るために先人たちは屍しかばねを曝さらしてきたわけではごわはん。いかに将来国庫が満ち、精巧な兵器を持つとも、利益のみを追い求める国となつては、こん地上に存在する価値はありもは

木戸

ん。日本は産業も資源もない。あるのは武士のみでござわす。己を捨て、世のために生命をもやす武士の魂をなくして、外国に誇るべき精神がどこにござわすか？ 木戸先生にお伺いしたか。こげな国を作りたかち思うておられもしたか？ 役人だけが綺羅を飾り、食うや食わずの庶民は、金ほしさに恥も外聞も忘れていがみ合っておりもす。坂本さあは何のために命を落とされたか、村田先生は何を望んでお亡くなりになったか、そいに応えられんような国は、守る価値があるのでござわすか？ 逃げの小五郎は、何のために生き延びてきたとでござわすか？ 僕だつて齒がゆいし、悔しい。だが一氣に動けば、この国は焦土と化す。西郷さんもそれはわかつているはずだ。二人でここまで来たのに、何を今更生き急ぐ？ まさかまっすぐな道が、青空の下に走っているなどと思つてはいまい。曲がりくねった道の上に、白い雲があるのが常ではないか。この国はまだ生まれればかりだというのに、今の仰りようでは、まるで死に場所を探しているかのようだ。

西郷

おいに明日は要りもはん。命も要らず、名も要らず、官位も金も要りもはん。ただただ国家の大業を望むのみでござわす。

木戸

今西郷さんが立てば、何万もの若者が道連れになる。あと五十年、いや百年かけて、彼らをどう生かすか、それが国家の大業だろう？

西郷

おいは爆発寸前の桜島の上で昼寝をしておるようなものでござす。いつまで抑えられるか。

木戸

もう彼らの好きにさせよう。そもそも若い連中は僕らの言うことなど聞きやしない。彼らは僕らの志をいとも簡単に踏みにじる。やがて国は荒れ果て、行き場を失うことになるだろう。しかし、僕らはこのまま消え去らない。流れとまらぬ河の瀬に、月影ばかりはすみ残る。道なき道に分け入って、声なき声となり、遙か彼方の志にささやきかけようではないか。

西郷

おいはこの身体を投げ出すだけでござす。

大久保

吉之助きちのすけどん、また仕事を途中で放り出すつか？

西郷

一蔵いちぞうどん、後のことはよろしゅう頼んみやげもす。

大久保

そいは吉之助どん、おいの知ったこつか。いつでんこいじゃ。今はちゆう大事なときにお前まへさあ、逃げなさる。後始末はおいがせんにやならん。いつでんこいじゃ。もう、知ったこつか。

西郷

……仕様がなか。こいもまた天命でござす。

西郷、立ち上がる。砲声。

木戸 西郷、大概にせんか！

砲声がさらに激しくなって、溶暗。

エピソード 京都東山

溶明。奥の活け花が桜になっている。
京都東山の旅館。病の木戸が布団にいる。

木戸 (うなされて) 西郷、大概にせんか!

女将 木戸先生、大丈夫ですか?

木戸 あ、ああ。

女将 お加減どうですか?

木戸 女将か。

女将 うなされてはりましたな。

木戸 そうか。

女将 お加減、どうぞ?

木戸 ありがとうございます。少しよくなったような気がする。

女将 そらよろしおした。

木戸 いろいろとすまんな。また迷惑をかけてしまった。

女将 うちが旅館どっさかい、ゆっくりしてくれはったらええんです。

木戸 ここから東山がよく見えるなあ。

女将 はい。あそこらへんに、桂さんがお建てになった東山の霊山墓地がございます。坂本様や村田先生はじめ、吉田様、高杉様らのお墓が建っております。

木戸 それだけ仲間がいるとは心強い。安心してあっちの世界に旅立てる。何言うてはるんですか。まだまだ働いてもらわんと、皆さんに叱られまっせ。

木戸 簡単に許してくれそうにないからな。そういえば、吉田稔麿君や、宮部鼎蔵^{べいでいぞう}さんを埋葬し、回向^{えいこう}してくれたのは女将だったそうだな。

女将 あの頃のことですから、大した供養もできず、申し訳ありまへんでした。

木戸 いや、新撰組の目を盗んで埋葬するのはさぞ大変だったろう。親戚でもできることではない。(頭を下げて) 本当にありがとう。おかげで皆救われた。

女将 そんな、もったいないお言葉。いややわ。

木戸 あまりにもたくさんの方が亡くなった。それだけの価値があったのかな？ この国はいい国になったと思うか？

女将 そんな難しいこと私にはわかりまへん。

木戸 女将の暮らしはどうだ？ 少しは楽になったか？

女将 商売はあきまへんなあ。税金は前より高うなりましたし。

木戸 そうか。そうだろうな。

女将 けど、ややこしいお客さんは少なくなりました。

木戸 ややこしい客？

女将 ええ。皆さん、ちよつとだけお行儀ようになって、上品になられたような気がします。

木戸 そうか。そんなもんか。

女将 そんなもんどす。けど、それでええんと違いますか？

木戸 そうだな。それでいいのかもしれない。

女将 お食事、召し上がらんのどすか？

木戸 すまんが下げてくれ。なんだか、食欲がなくてな。

女将 それはいけまへんな。ほな、おひつは置いときますよつてに、気が向いたらお召し上がりください。

木戸 ああ、ありがとう。

女将 ほなうちはこれで。幾松はん、あとはよろしゅう。

幾松が入ってくる。女将、膳を下げ、退場。

幾松 あなた。

木戸 幾松、何でここに？

幾松 女将さんが知らせてくださいました。どうして、何も仰ってくださいならなかったのです？

木戸 騒ぐほどのことじゃない。

幾松 食事もろくに食べられてないんでしょう？

木戸 ちよつと胃が痛んでな。いつものことだ。

幾松 嘘。お顔が真っ青です。

木戸 医者に診てもらっているから、心配いらん。

幾松 あなたが病に倒れられ、陛下までお見舞いに来てくださったとか。それほどお悪いんでしょう？

木戸 そうじゃない。まったく、ありがたいやら、申し訳ないやらだ。

幾松 はるばる京都までいらした大久保様や伊藤さんにも、お会いにならないと伺いました。

木戸 大丈夫だ。僕がいなければいけないで、大久保さんが上手くやってくれる。

幾松 私が心配しているのは、御政道ではなくてあなたのお身体です。

木戸 わざわざ京都まで出て来るほどのことじゃない。

幾松 ではあなたを捨て置いて、芝居見物でもしてたらよろしいんですか？
木戸 そう怒らんでくれ。

幾松 怒ってません。情けないだけです。

木戸 すまんすまん。お前の顔を見たら、急に食欲がわいてきた。おにぎり、握ってくれんか？

幾松 はい。(おにぎりを握る)

木戸 苦労かけるな。

幾松 そんなこと。水くさい言い方せんといってください。

木戸 うん。ときに、桜はまだ残っているか？

幾松 いえ、すっかり散ってます。もう五月になりますから。

木戸 (活け花の桜を見て) じゃあこれは？

幾松 さあ。女将さん、どこから手に入れはったんですやろ。どこか遠いところの桜なんですやろな。

木戸 そうか。今年はろくに見られなかったから、ありがたい。

幾松 はい、どうぞ。

木戸 ありがとう。(食べる) うん、うまい。

幾松 よかった。

木戸 お前もどうだ？

幾松 いえ、私は。お番茶、入れますね。（急須に入っているお茶を注ぐ）
木戸 ああ。すまんな。

幾松 どうぞ。

木戸 （お茶を飲んで）番茶も出花か。いいもんだな。
幾松 はい。

木戸 僕はここが好きだ。できればこの街で余生を送りたかった。
幾松 お似合いです。

木戸 乞食のコースケに？

幾松 そういう意味と違います。意地悪。

木戸 （笑って）すまんすまん。

幾松 やっと二人になれました。

木戸 そうだな。二人でゆっくりできたのは、逃げ場をなくしたあの頃だけ
だった。

幾松 ほんまどすなあ。元気になられたら、またいろんなお方がやって来は
るんですやろなあ。

木戸 世の中は 桜の下の相撲かな

幾松 なんです？ それ？

木戸 桜の下で相撲を取ると、勝った者には花が見えない。ところが負けて

幾松

仰向けに倒れると、花が見える。世の中そうしたものだ。

木戸

それやったら負けて倒れた方が、粹かもしれまへんな。

幾松

うん。一つ、聞かせてくれ。

はい。

幾松

調子揃そろわぬいとすじの きのふ二上にあがりけふ三下さんさがり

ほそひ世渡り日渡りも そこでなぶられ ここではせかれ

ぬしのところに誠があらば つらいつとめもいとやせぬ

幾松の三味線が続く中、かすかに吉田、岡田、近藤、坂本、村田、西郷、大久保、岩倉、女将らが浮かび上がり、木戸の方を見ている。幕。

